

田向遺跡

第1・2次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第217集



た　む　か　い

田向遺跡

第1・2次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第217集

平成27年

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター





A 区完掘状況全景（南から）



B・C区完掘状況全景（北西から）

序

本書は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成 24 年 4 月 1 日に財団法人から移行）が発掘調査を実施した、田向遺跡の調査成果をまとめたものです。

田向遺跡は、山形県村山市に所在します。村山市は、山形盆地（村山盆地）の北端に位置し、県内のほぼ中央に位置しています。東には奥羽山脈、西には出羽丘陵に囲まれ、さらに市内中央を最上川が蛇行しながら北流し日本海に注いでいます。また、市内には数多くの遺跡が分布し、現在までに 150 以上の遺跡が登録されています。時代は旧石器時代から中・近世と多岐にわたっています。

この度、東北中央自動車道（東根～尾花沢間）事業に伴い、事前に工事予定地内に包蔵される、田向遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、主に平安時代の土師器・須恵器、近世・近代と考えられる陶磁器、瓦質土器、銭貨、石製品などが出土しています。遺構は柱穴、土坑、溝跡などが確認され多大な成果を得ることができました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成 27 年 3 月

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 菅野 滋

凡　　例

- 1 本書は、東北中央自動車道（東根～尾花沢間）建設に係る「田向遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 既刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の委託により、公益財团法人山形県埋蔵文化財センター（平成24年4月1日に財團法人から移行）が実施した。
- 4 本書の執筆は、安部将平、渡邉安奈が担当し、三浦秋夫、小笠原正道、黒坂雅人、伊藤邦弘、齊藤敏行、須賀井新人が監修した。本書の執筆分担は、以下のとおりである。
 - 第Ⅰ章 安部将平、渡邉安奈
 - 第Ⅱ章 安部将平
 - 第Ⅲ章 安部将平
 - 第Ⅳ章 パリノ・サーヴェイ株式会社
 - 第Ⅴ章 安部将平
- 5 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系（世界測地系）により、高さは海拔高で表す。方位は座標北を表す。
- 6 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

SP…柱穴	SK…土坑・倒木痕	SD…溝跡	SG…池跡
SX…性格不明遺構	RP…登録土器		
- 7 遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示した。
- 8 遺物実測図の断面黒塗りは須恵器を表す。
- 9 基本層序および遺構覆土の色調記載については、2008年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」によった。
- 10 遺物観察表において括弧内の数値は、図上復元による推定値を示している。

調査要項

遺跡名	田向遺跡		
遺跡番号	208-132		
所在地	山形県村山市大字字取字田向		
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所		
調査受託者	財團法人山形県埋蔵文化財センター（平成 22・23 年度） 公益財團法人山形県埋蔵文化財センター（平成 25・26 年度）		
受託期間	平成 22 年 4 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日 平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日 平成 25 年 4 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日 平成 26 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日		
現地調査	平成 22 年 5 月 17 日～8 月 24 日、10 月 26 日～11 月 29 日 平成 23 年 5 月 16 日～6 月 13 日		
調査担当者	平成 22 年度	調査課長 課長補佐 主任調査研究員 調査研究員 調査員	阿部明彦 伊藤邦弘 高橋敏（調査主任） 三浦勝美 佐藤智幸
	平成 23 年度	調査課長 考古主幹 調査研究員 調査員	安部実 伊藤邦弘 大場正善（調査主任） 板橋龍
	平成 25 年度	整理課長 調査員	黒坂雅人 渡邊安奈（整理主任）
	平成 26 年度	整理課長 調査員	伊藤邦弘 安部将平（整理主任）
調査指導	山形県教育庁文化財保護推進課（平成 22・23 年度） 山形県教育庁文化財・生涯学習課（平成 25・26 年度）		
調査協力	東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所 村山市教育委員会 山形県教育庁村山教育事務所 村山東根土地改良区		
業務委託	地形・遺構測量（俯瞰撮影）業務 国際航業株式会社（平成 22・23 年度） 基準点測量業務 国際航業株式会社（平成 22 年度） 株式会社三和技建（平成 23 年度）		
	理化学分析業務 バリノ・サーヴェイ株式会社（平成 22・25 年度）		
発掘作業員	五十嵐洋子 井上正三郎 志賀昭夫 海老名則子 奥山洋子 森崎次男 加藤道子		

木村石美 今野啓治郎 佐々木幸治 齊藤敦子 齊藤弘治 齊藤繁一 斯波久一郎
佐藤孝子 笹原武司 須藤喜志雄 竹井均 縄正治 掘雄一 松坂英勝
松田大樹 結城孝子 (五十音順)
整理作業員 鏡 幸枝 小林美喜 渡部真紀 (五十音順)

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過と方法	1
3 グリッド設定	2
4 整理作業の経過	2
II 遺跡の位置と環境	
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
III 調査の成果	
1 調査の概要	10
2 A 区の遺構	10
3 B 区の遺構	11
4 C 区の遺構	11
5 出土遺物	12
IV 理化学分析	
1 土壤理化学分析 (1)	38
2 土壤理化学分析 (2)	39
V 総括	
1 調査のまとめ	42
2 SD114・149・235について	42
報告書抄録	卷末

表

表1 調査工程表	2	表6 陶磁器觀察表	37
表2 遺跡地名表	7	表7 金属製品觀察表	37
表3 柱穴觀察表	32	表8 石製品觀察表	37
表4 土師器・須恵器觀察表	36	表9 土壤理化学分析結果 (1)	38
表5 陶磁器觀察表	36	表10 土壤理化学分析結果 (2)	40

図 版

第 1 図 調査区概要図	3	第 18 図 SP59・63・64・69・87・91～93・97・110・ 121 柱穴	27
第 2 図 地形分類図	5	第 19 図 SP122・128・138・142・147・148・192・ 197 柱穴	28
第 3 図 道路位置図	6	第 20 図 SP203～205・233・240・244・245・248・265・ 268 柱穴	29
第 4 図 調査区全体図 (1)	14	第 21 図 SK1002・1058・1065・1073・1075 土坑	30
第 5 図 調査区全体図 (2)	15	第 22 図 SP1005・1006・1013・1016・1028・1031 柱穴・ SK1079 倒木痕	31
第 6 図 A 区遺構配置詳細図 (1)	16	第 23 図 SK1080 倒木痕	33
第 7 図 A 区遺構配置詳細図 (2)	17	第 24 図 A 区出土遺物	34
第 8 図 A 区遺構配置詳細図 (3)	18	第 25 図 A・B 区出土遺物	35
第 9 図 A 区遺構配置詳細図 (4)	19	第 26 図 B・C 区出土遺物	36
第 10 図 B・C 区遺構配置詳細図 (1)	20	第 27 図 SD114・149・235 道路跡想定図 (古段階)	43
第 11 図 B・C 区遺構配置詳細図 (2)	21	第 28 図 SD114・149・235 道路跡想定図 (新段階)	43
第 12 図 基本層序位置図	22	第 29 図 道路跡想定ライン図	44
第 13 図 A～C 区基本層序	22	第 30 図 明治 34 年測量地形図	44
第 14 図 SD10・11・12 溝跡・SP25 柱穴	23	第 31 図 明治 34 年測量昭和 40 年修正地形図	44
第 15 図 SD113・114・172 溝跡・SP115～118・131・208・ 209 柱穴	24		
第 16 図 SD149・187・228・235 溝跡・SP229・232・ 236 柱穴	25		
第 17 図 SP34・35・37・38・41・44・45・47～49・ 58 柱穴	26		

写 真 図 版

写真写真 1 A 区完掘状況全景	写真図版 6 SK1002・1058・1065・1073 断面・完掘状況
写真写真 2 B・C 区完掘状況全景	写真図版 7 SK1075 断面・完掘状況・SK1058・1065・1073・ 1075 完掘状況・SP1005・1006・1013 断面
写真図版 1 A 区調査前全景、A 区北壁基本層序、A 区東側遺構 検出状況、A 区西侧遺構検出状況、A 区完掘状況	写真図版 8 SP1016・1028・1031 断面、C 区調査前全景 C 区南側基本層序 (1)・(2)、SK1079・1080 断面
写真図版 2 SD10～12 検出・完掘状況、SD149・187・228・ 235 検出・完掘状況	写真図版 9 C 区遺構検出状況、C 区完掘状況
写真図版 3 SD113・114 検出状況、SD114・SP118 断面	写真図版 10 A 区出土遺物
SD149・187・228 断面、SP128・131・142 断面	写真図版 11 A・B 区出土遺物
写真図版 4 SP147・192・197・203・204・205・240・ 244 断面	写真図版 12 A・B・C 区出土遺物 (1)
SP245・248・268 断面、B 区東壁基本層序	写真図版 13 A・B・C 区出土遺物 (2)
B 区北側遺構検出状況、B 区完掘全景	

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

田向遺跡の発掘調査は、国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所による東北中央自動車道（東根～尾花沢間）の建設事業に伴う緊急発掘調査である。

平成 8 年に建設省東北地方建設局山形工事事務所（当時）により東北中央自動車道相馬尾花沢線東根尾花沢間（当時）が計画された。建設事業の内容は、東北内陸部の産業、経済、文化の広域的な交流・連携の促進はもとより、緊急時における代替および迂回等のネットワーク機能の強化を目的としている（国土交通省 2011）。これを受け山形県教育委員会は、平成 11 年 4 月に現地踏査を行い、同年に本遺跡を新規登録した。のち平成 21 年 3 月 25・26 日の 2 日間にわたって、事業予定地についての詳細分布調査（試掘調査）を実施し、1.5m×10～20m のトレングチ計 17 本（総面積約 300 m²）を設置した。その結果、遺構・遺物が確認できたトレングチは 6 本であった。遺構は地表面 30～40cm の深さから溝跡、土坑、柱穴を検出、また一部の地山面から十和田大火山灰が確認された。遺物は縄文土器片、須恵器片、陶器片が出土した（山形県教育委員会 2010）。

試掘調査の結果を受け、平成 21 年 3 月 30 日に山形県教育委員会から事業主体である国土交通省山形河川国道事務所に対し、本遺跡の詳細分布調査報告が行われた。その後、同事業関連で削平される範囲について記録保存のための緊急発掘調査を実施する運びとなり、財團法人山形県埋蔵文化財センター（当時）が国土交通省山形河川国道事務所から委託を受けて、発掘調査を実施する事となった。平成 22 年度に第 1 次調査、平成 23 年度に第 2 次調査を行った。なお、同じ東北中央自動車道（東根～尾花沢間）建設事業に伴う発掘調査は現在（平成 26 年度）までに本遺跡を加え 19 遺跡を数える。

2 調査の経過と方法

第 1 次調査は、平成 22 年 5 月 17 日～8 月 24 日、10 月 26 日～11 月 29 日までの延べ 76 日間で実施した。

平成 21 年度の試掘調査の結果、事業範囲内の中央部は昭和 40 年代に行われたほ場整備により削平を受けていたため、調査対象範囲から除外された。調査区は南側（A 区）3,700 m² と、北側（B 区）800 m² の 2 地区に分け調査を実施した（第 1 図）。B 区の調査は、調査区東に設置されている農業用ビニールハウスの使用に伴い、B 区の中央から北側半分の範囲を農道として使用する予定であった為、先行して B 区南側を調査し、農道の使用が一時中断したのち、B 区北側の調査に着手した。

5 月 17 日に調査事務所に器材搬入を行い、調査を開始した。調査区設定後に調査区外周に沿って線掘りを行い、5 月 18 日～6 月 11 日にかけて A 区・B 区南側を重機による表土除去を行い、表土除去終了区域から順次面整理及び遺構検出を実施した。またそれと並行して外部委託による基準点測量（グリッド杭打設）を行った。7 月 6 日から遣り方・平板測量による平面図作成を実施、その後、平面図作成の進捗状況を確認しながら、順次遺構精査を B 区南側から A 区へと進めていった。その間、土層断面図作成、写真撮影などの記録作業を適宜行っていった。

8 月 24 日には、外部委託による調査区（A 区から B 区南側の範囲）の空中写真測量を実施し、A 区・B 区南側の調査を終了した。また、9 月 26 日には、現地で本遺跡を含めた 3 遺跡合同の調査説明会を実施、地元住民を中心とした 70 名の参加を得た。

10 月 26 日から農道直下である B 区北側の調査を開始した。前半の調査同様、重機による表土除去、遺構検出、遺構精査、記録作業の順で調査を進めた。

11 月 26 日には、外部委託による B 区を中心とする空中写真測量を実施した。11 月 29 日に B 区北側の農道取り付け及び補修を完了し、第 1 次調査を終了した。

第 2 次調査は、平成 23 年 5 月 16 日から 6 月 13 日までの延べ 20 日間で実施した。対象は第 1 次調査で調査した B 地区の北側 200 m²（C 区）について調査を実施した（第 1 図）。5 月 16 日に調査事務所に器材搬入を行い、翌 17 日は重機による表土除去、外部委託によ

1 調査の経緯

る基準点打設及び遺構検出作業を実施した。その後、調査区土層観察用のサブトレーンチの設置及び掘り下げ、遺構精査を行い、進捗状況を確認しながら適宜、平面面図・等高線の作成、写真撮影などの記録作業を行った。

6月8日には、外部委託による空中写真撮影、6月10日には現地で事業主体者である国土交通省山形河川国道事務所の担当者、山形県教育委員会ほか関係者向けに調査報告を行った。6月13日には、器材撤収を行い、第2次調査を終了した。

3 グリッド設定

調査区を区画するグリッドは、平面直角座標系第X系: X = -26,000,000, Y = -12,000,000を原点とし4m四方で設定した(第1図)。グリッド設定基準は、まず山形県全域を囲むように南北をX軸、東西をY軸とし、X軸をA～E、Y軸をA～Cとし県全域を画した。このアルファベット表記を40km単位で大グリッド、その中を400mに区分する中グリッド、さらにその中を4m単位で区分する小グリッドを設定した。中・小グリッドは、共に数字表記で南から北へ00～99、西から東へ00～99で表記し、「AA0000～0000」と位置を表す。

表1 調査工程表

平成22年度	5月		6月			7月			8月						
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
作業内容／週															
環境整備															
表土除去															
グリッド設定															
面整理・遺構検出															
遺構精査															
記録（作図・写真）															
空中写真撮影															
発掘調査説明会															

平成22年度	9月		10月		11月		
	16	17	18	19	20		
作業内容／週							
環境整備							
表土除去							
グリッド設定							
面整理・遺構検出							
遺構精査							
記録（作図・写真）							
空中写真撮影							
発掘調査説明会							

記した。この表記方法は、当事業にかかる他の村山地区の遺跡にも共通に適用されている。

4 整理作業の経過

平成22・23年度の整理作業は、各調査の終了後から整理作業を開始した。出土遺物については洗浄、注記の基礎整理作業、また図面、写真、台帳などの記録類の整理を行い、平面面図のデジタルトレース作業を行った。

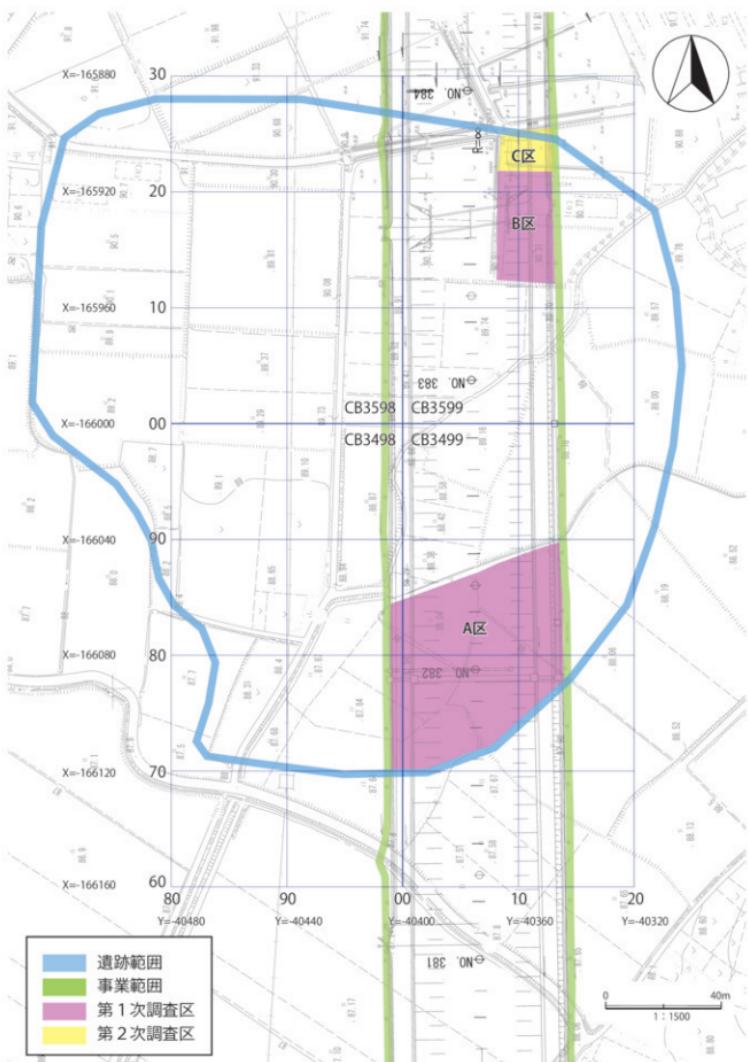
平成25・26年度は、第1・2次出土遺物の接合・復元、掲載遺物の実測図作成、実測図のデジタルトレース、遺構図版作成、版組み、遺物写真撮影、原稿執筆など報告書作成・編集作業を行った。理化学分析としては、第1次調査で検出した4基の土坑から採取した数点の土壤サンプルを外部委託し土壤分析を行った。その結果報告を第IV章に掲載している。

報告書作成後の出土遺物については、報告書に掲載したものと未掲載のものを別にして梱包・収納した。なお、本報告書掲載遺物については、追加で図番号を注記している。本遺跡の調査成果をまとめ、平成27年3月末日に本報告書を刊行した。

平成23年度	5月		6月		
	1	2	3	4	5
作業内容／週					
環境整備					
表土除去					
グリッド設定					
面整理・遺構検出					
遺構精査					
記録（作図・写真）					
空中写真撮影					
発掘調査説明会					

引用・参考文献

- 国土交通省東北地方整備局 2011 「道路事業再評価 東北中央自動車道東京～尾花沢」 平成23年度事業評価監視委員会(第2回) 資料
山形県教育委員会 2001 「分布調査報告書(27) 山形県埋蔵文化財調査報告書第201集
山形県教育委員会 2011 「分布調査報告書(36) 山形県埋蔵文化財調査報告書第214集
財团法人山形県埋蔵文化財センター 2011「年報 平成22年度」
公益財團法人山形県埋蔵文化財センター 2012「年報 平成23年度」



第1図 調査区概要図

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

田向遺跡は、山形県村山市大字名取字田向（北緯 38 度 30 分 17 秒、東經 140 度 22 分 12 秒）に位置する。

本遺跡が位置する村山市は、山形盆地（別名村山盆地）の北端に位置し、山形県内のほぼ中央部に位置している。面積は、196.46km²を測り、県内 35 市町村の中でも、9 番目の広さを誇る。8 地区（大倉、袖崎、西郷、大久保、富木、戸沢、大高根）から構成され、本遺跡は、西郷地区に位置する。東方には奥羽山脈の一主峰をなす鳴岳、西方には出羽山地に属する篠山が並んでいる。地形割合は、山地・火山地が 59.7% と半数以上を占め、丘陵地が 4.6%、台地・段地が 20.9%、低地が 14.8% となっている。地目別割合は、田が 15.9%、畑が 10.8%、山林・原野が 45.0%、宅地が 3.9%、その他 24.3% となっている（佐藤 2011）。

山形盆地は、南北 40km、東西 10 ~ 20km の舟底形で扇状地の発達の良い盆地と言われており、北側に隣接する尾花沢盆地とは河島山丘陵、南側に隣接する上山盆地とは蔵王火山の泥流堆積による抉控部によって画される。盆地の東側には、北から乱川扇状地、立谷川扇状地、馬見ヶ崎川扇状地等が並列し、北のものほど規模が大きく、開析が進み、段丘化している。西側には、比較的平坦な寒河江川扇状地が広がる。山々に囲まれた典型的な内陸型の盆地で寒暖の差が大きい。年間降水量は多くないものの、年間降雪量は多く、時には零下 15℃ を下回ることもあるという。また、昼夜の温度差が大きいことから、果樹や農作物の栽培には適している。盆地中心には、吾妻山（米沢市）を水源とする流路延長 229km の最上川が蛇行しながら北流し、盆地両側の丘陵に源を発する中小河川がこれに合流し、日本海に注ぐ。流域には、肥沃な土地が開けている。

本遺跡は、山形盆地と尾花沢盆地との境にある河島山段丘の南麓につながる標高約 90m の低地部に位置する。地目は水田、畑地にあたる。地形分類図上では、最上川右岸の河間低地にあたる（第 2 図）。表層地質は、未

固結の礫、砂および粘土からなる段丘堆積物である。最上川右岸の道六から大淀に至る丘陵には、厚さ 1 ~ 2m の中粒礫の上に 3m ほどの白色の粘土層及び厚さ 2m の細粒礫が堆積する。耕作土壤は、中粒粗灰色低地土壤（灰褐色系）である。非固結堆積岩を母材とし、堆積様式は水積で河間低地、扇状地に分布し、水田として利用されている。土性は壤質で漏水しやすく、塩基、珪酸、有効鉄素、及びマンガン、鉄の養分も少ない生産力の低い土壤が多い（山形県企画調整部土地対策課 1981）。

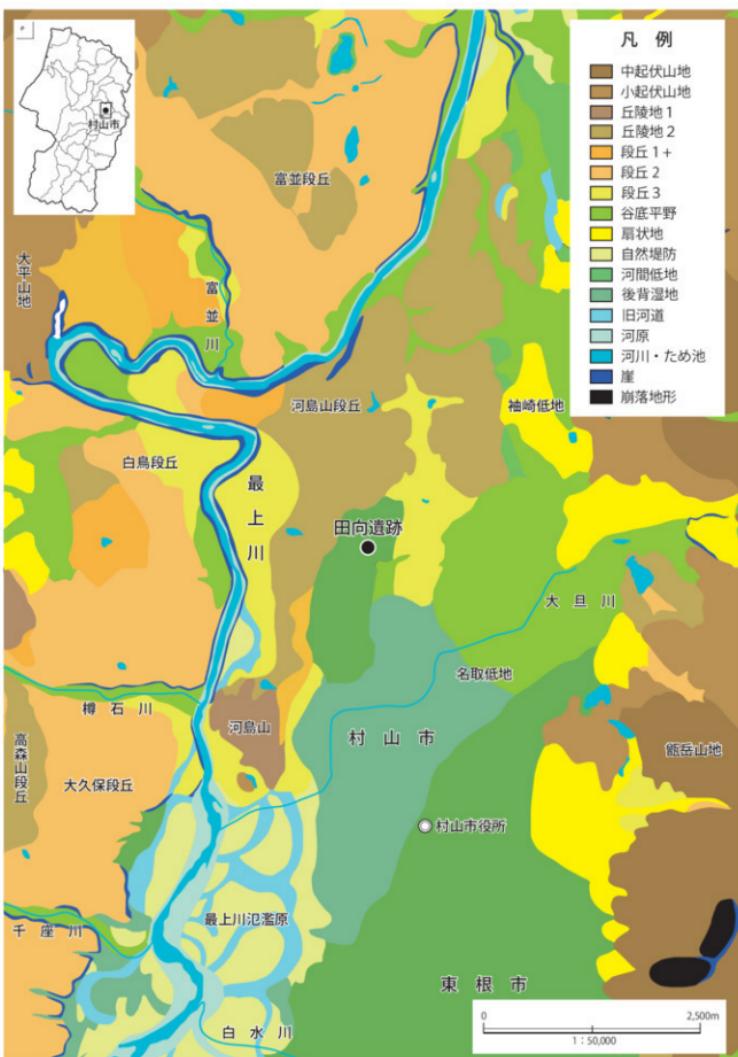
2 歴史的環境

村山市では、数多くの遺跡の分布・発掘調査が実施されている。現在までに 150 廻所以上の遺跡が確認されている。

田向遺跡は、最上川右岸の河島山丘陵南麓に広がる微高地に位置する平安時代の集落跡である。周囲には、多くの遺跡が分布し調査されている。第 3 図は、国土地理院発行の 1/25,000 地形図「富並」、「延沢」、「谷地」、「楯岡」を編集し、本遺跡を中心とした図幅内に、周知されている 48 遺跡を掲載した。

旧石器時代の遺跡は、本遺跡から北に約 1km 離れた清水西遺跡（7）と河島山遺跡（43）などが挙げられる。清水西遺跡は、平成 24 年度に当センターによる発掘調査が行われ、台形石器及び平坦打面で削離された厚手石刃を素材にしたナイフ形石器群などが出土している（山形県埋文 2013a）。河島山遺跡は、最上川右岸に張り出した出羽丘陵の突端、河島山から南斜面に位置している。杉久保型ナイフ、石刃、彫刻刀、搔器などの石器群が出土している。また河島山は立地条件に恵まれていたと考えられており、旧石器時代をはじめ、縄文時代（早期～中期）、弥生時代、古墳時代及び中世などに属する各期の遺構・遺物が確認される複合遺跡である。また、昭和 26（1951）年 4 月 1 日に城館跡、1 号墳、板碑群が県指定史跡に指定された（村山市史編さん委員会編 1981）。

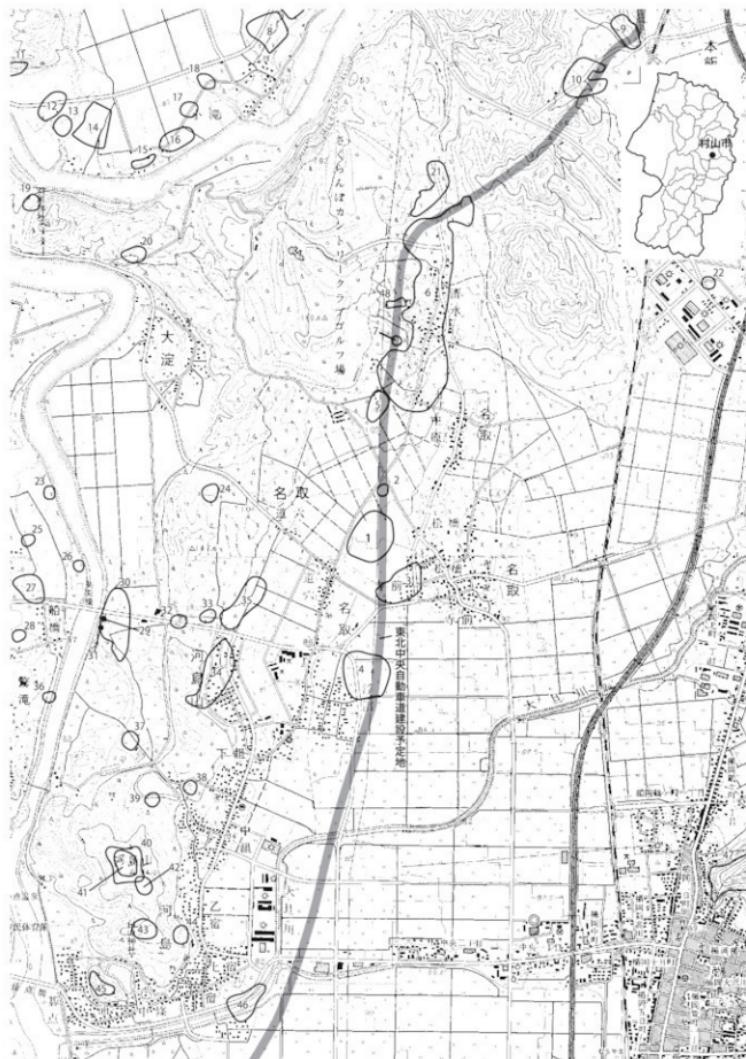
縄文時代の遺跡は、早期から晩期に至るまで各時期の



※『土地分類基本調査 尾花沢・福岡』山形県企画調整部土地対策課 1979・1981の地形分類図に加筆

第2図 地形分類図

II 遺跡の位置と環境



※国土地理院発行2万5千分の1地形図「富並」「延沢「谷地」「桶岡」に加筆

第3図 遺跡位置図

表2 遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	田に向	散布地	縄文	25	袋	集落跡	縄文・奈良
2	田に向2	集落跡	平安	26	川口A(大情)	集落跡	縄文・奈良
3	松崎	散布地	平安・中世	27	船崎	集落跡	縄文
4	岬田	散布地	平安	28	鹿の子沢C	集落跡	縄文
5	経塚森	散布地	平安	29	後原(埴塚)	埴塚	中世
6	清水	散布地	縄文・平安	30	後原	集落跡	縄文・奈良
7	清水西	集落跡	旧石器・縄文	31	後原(板碑)	集落跡	平安
8	小塙A	集落跡	縄文	32	西原A	散布地	縄文
9	大原口	集落跡	縄文	33	西原B	集落跡	平安
10	東熊野苗畑	集落跡	縄文	34	西原C	集落跡	縄文・奈良・平安
11	里向山B	集落跡	縄文	35	草伊賀B	集落跡	平安
12	里向山C	散布地	縄文	36	川口B(大情)	集落跡	縄文
13	里向山D	散布地	縄文	37	後久保	集落跡	縄文・平安
14	川口	集落跡	縄文	38	河島山口A	集落跡	縄文
15	早房A	集落跡	縄文	39	河島山口B	集落跡	縄文
16	早房B	集落跡	縄文	40	河島山	城郭跡	中世
17	早房C	集落跡	縄文	41	河島山古墳群	埴塚	古墳
18	早房D	集落跡	縄文・弥生	42	河島山	城郭跡	中世
19	小坂	集落跡	縄文	43	河島山	集落跡	先史
20	浦	散布地	縄文	44	堀川前山	集落跡	弥生
21	清水北	散布地	縄文・平安	45	河島・丸森	集落跡	縄文
22	第二農場	集落跡	縄文	46	八反稲千原	散布地	縄文・平安
23	稚子	集落跡	縄文・平安	47	樋回城	城郭跡	中世
24	草伊賀	集落跡	縄文	48	羽黒神社西	集落跡	縄文

遺跡が確認されている。川口遺跡（14）では、堅穴住居跡13棟、墓塚45基（石組による石棺墓を含む）、集石構造、立石遺構などが検出されている。（6基確認されている）石棺墓は、その主軸方向に共通性があり、石組を有するタイプの墓塚として全体的にまとまりがあると指摘されている。立石遺構は、立石（石棒）はほぼ垂直状態で出土し、極めて稀少な事例である。出土遺物は、土器をはじめ多種多様なものが出土している。土器は堀之内2式・加曾利B式に相当するものや東北地方北部の十勝内1式系も出土している。石器は、日常の生業で使用されるものの他、石棒・石刀などが出土している。また、「パン状炭化物」・「アスファルト塊」^{井手等著}が出土している（山形県教委1990）。早房D遺跡（18）は、富並段丘の南端、最上川にむかって舌状に張り出した段丘上に位置する。遺物は、大洞B式の半精製深鉢が出土し、後期から晩期の遺跡と捉えられている（山形県教委1988）。羽黒神社西遺跡（48）は、平成26年度に当センターによる発掘調査が行われ、盛土遺構、フラスコ状土坑、石匂い砂、土器敷き石匂い砂などを検出した。遺物は縄文中期中頃（大木8b式）の遺物（土器・土製品・石器・石製品など）が出土し、さらに少量ながらも縄文早期（押型文・条痕文・尖底土器）の土器片が出土して

いる（山形県埋文2014b）。

弥生時代の遺跡は、確認数は少ない。堀川前山遺跡（44）は、河島山の南東斜面に位置し、後期の天王山式に並行する土器とアメリカ式石鎚が出土している。遺跡位置図範囲外にあるが、^{いなべて}稲下遺跡は、最上川左岸、本遺跡から南西に約2.6kmの地点で北側に最上川支流の樽石川が流れれる河岸段丘状に位置する。遺構は被熱した集石遺構のみである。土器は包含層より中期～後期に属するものが出土しており、中でも中期中葉の高环などが注目される（小閑1995）。

古墳時代の遺跡は、河島山古墳群（41）、名取古墳が挙げられる。河島山古墳群は、河島山1号墳・2号墳からなる。1号墳は、河島山頂付近の東斜面に位置する。円墳で墳丘頂部は径約8m、墳丘の底径は約24m、高さ約4m、墳丘周辺には幅約4mの周溝を有している。凝灰岩製の箱型石棺で、副葬品は確認されておらず、また埴輪・葺石も確認されていない。2号墳は、同山の南西にある丸森山山頂付近に位置する。1号墳同様、円墳で周囲には周溝を有する。両古墳とも本格的な発掘調査は行われていない。名取古墳は、河島山から北に約3km、河島山に連なる丘陵の西側で最上川の自然堤防上に位置する。河島山1・2号墳と同様、円墳で墳丘頂部は径約

10m、墳丘の底径は約36m、高さ約2.4m、墳丘全周に周溝をめぐらす。日本海側で最北に位置する古墳として注目される（伊豆田1990）。また、当センターで平成22年度に発掘調査を実施した東熊野苗畠遺跡（10）の河川跡から古墳時代前期と考えられる土師器甕片が出土している（山形県理文2011）。

奈良・平安時代の遺跡は、当センターが行った平成22～25年度の発掘調査によって、村山市の古代の様相がより明らかになりつつある。本遺跡（1）、田向2遺跡（2）、松橋遺跡（3）、蟇田遺跡（4）、経塚森遺跡（5）、清水遺跡（6）、西原C遺跡（34）などが挙げられる。田向2遺跡では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡、土坑などが検出され、中でも一部の溝跡、土坑から10世紀中葉から後葉に比定される土師器環・皿が出土している。松橋遺跡では、掘立柱建物跡、井戸跡などが検出され、遺物は土師器・須恵器・磁器で、9世紀後半から10世紀前半頃を主体とする集落跡である。経塚森遺跡では、平安時代と考えられる掘立柱建物跡などを検出した（山形県理文2011）。蟇田遺跡では、掘立柱建物跡、河川跡などが検出され、出土遺物は土師器环体部に「定」と書かれた墨書き土器、木製の簀車、人形や鳥形などの祭祀儀礼に使われたと考えられる遺物などが出土している（山形県理文2013a）。清水遺跡では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡などが検出され、一部の竪穴住居跡、溝跡などの覆土から西暦915年に噴火した十和田火山のものと考えられる灰白色火山灰が確認されている。9世紀代と考えられる区画溝に囲まれた掘立柱建物群が確認され、大きいもので3間×3間で、倉庫群の可能性が高いと考えられている。また、これらの建物間で時期差は確認されないことから短期間に建て替えが行われたと考えられている。出土遺物は土師器・須恵器のほか、土師器底部に「櫛」「刑」「太」「寺」と書かれた墨書き土器、鉄製鋤鍤車、鉄滓、輪の羽口などが出土している（山形県理文2011・2012・2013a）。西原C遺跡は、平成7年に村山市教育委員会による発掘調査が行われ、掘立柱建物跡、竪穴住居跡などが検出され、中でも掘立柱建物跡は広範囲にわたり20棟以上検出されている。出土遺物は、土師器・須恵器のほか、須恵器环底部に「石」と書かれた墨書き土器、上製鋤鍤車や砥石などの石製品が出土している（村山市教委1996）。

中世は、河島山遺跡（40・42）、樋岡城（47）などが挙げられる。河島山遺跡は、山頂と東側の山腹と2箇所に分かれ、山頂はチャシ址一の丸と呼ばれる鉢巻式遺跡で、空堀と土堤に囲まれた円形の曲輪である。チャシ址二の丸は二重の空堀で曲輪は削平されず、自然地形のままである（山形県教委1996）。両者の築城年代は異なる解釈が出されているが、詳細は不明である。また、河島山からは多数の板碑・五輪塔などが完形・破片を合わせ70基以上確認されている。同山を開墾した際に出土したとされているが、現在は山頂の一隅にまとめられている。板碑の石材は、凝灰岩で様式はいずれも成型型を呈し、大きいもので、約90cmを測る。明確な時期は不明であるが様式から室町時代末頃から桃山時代初めと考えられている。樋岡城は、村山市街地の北東に隣接する樋山に築かれた連郭式の山城で別名舞鶴城とも呼ばれている。南側の山裾に館があり、館を中心には城下町が開いていた。樋山は、楓岳の西側に伸びる台地で、その先端の西樋山・中樋山から構成される。西樋山は、標高約209mで山腹は急斜面である。三方に伸びた尾根に大小の曲輪を段々と連続的に配置する。頂上の曲輪も平坦で、櫓などの建造物が築かれていたと考えられている。頂上からは近隣の市町村が一望できる。中樋山の頂上曲輪も平坦で南東部に建物跡が確認されているが、詳細は不明である。曲輪の東西は堀切で区切られており、樋岡城の沿革について『最上樋岡元祖記』には、承元2年（1208）に樋山月樋に開城したが4代にして没落、弘長元年（1261）に奥州より里見氏が入部して樋岡を開城、本城と名付けたとあり、5代144年間続いたとされる（山形県教委1996）。室町時代に入り、山形城主斯波兼綱の孫、最上満直の四男最上伊代守満国が応永13年（1406）に入部、樋岡氏を名乗って満国以後7代約190年間続く。樋岡城は最上氏にとって北進における重要な拠点であったとされる。

7代満茂・8代光直が活躍した近世期に兩樋山が城下と共に整備された。満茂は、秋田県南部攻略の中心となって活躍し、後に秋田湯沢城に移った。以後、樋岡城は最上家臣が交代で勤番するが、元和2年（1616）、最上義光の実弟で最後の城主である樋岡光直が封じられた後は、最上氏家中でも重要な地位を築く。光直は1万7千石を伴領し、領地は樋岡・湯野沢（現湯沢）・樋山及

び大石田・井出・深堀（現大石田町）の各村で、最上川を抑える要地であった（小畠 1995）。元和 8 年（1622）に最上氏が改易になったことにより、楯岡城は廢城となつた。また同年の名取村（現在の村山市名取・一部の楯岡地区）は、最上氏領から山形藩領になる。名取村は浮沼・中原・清水・境ノ目の枝郷がある。寛永 20 年（1643）からは幕府領、安政 2 年（1855）以降は松前藩領と移り変わり、明治期を迎える。

明治維新後の村山市は、行政区画の変遷に伴い旧幕府領は明治 2 年（1869）に酒田県、また翌年には山形県に編入された。近現代における名取村は、明治 11 年（1878）には北村山郡に属し、明治 22 年（1889）には名取・大淀・長島・河島が合併し、西郷村の大字となり、昭和 29 年から村山市の大字名となった（佐藤 2011）。

本遺跡の周辺には、先述した田向 2 遺跡、清水遺跡、松橋遺跡、鉢田遺跡などが位置している。

引用・参考文献

- 伊豆山忠悦 1990 「村山市」『山形県の地名 日本書紀大系 6』 p.475 ~ p.485 平凡社
 小畠広明 1995 「村山市」「角川 日本地名大辞典 6 山形県」 p.963 ~ p.969 角川書店
 佐藤敏春 2011 「村山市再発見～その姿と心～」
 村山市教育委員会 1996 「西原 C 遺跡発掘調査報告書」 村山市埋蔵文化財調査報告書第 4 集
 村山市史編さん委員会編 1981 「村山市史 別巻一 原始・古代」 村山市
 村山市史編さん委員会編 1994 「村山市史 近世編」 村山市
 山形県企画調整部土地対策課 1979 「土地分類基本調査 尾花沢 5 万分の 1 國土調査」
 山形県企画調整部土地対策課 1981 「土地分類基本調査 梶岡 5 万分の 1 國土調査」
 山形県教育委員会 1983 「農林事業関係遺跡（1）－発掘調査報告書－」 山形県埋蔵文化財調査報告書第 63 集
 山形県教育委員会 1988 「早房 D 遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第 131 集
 山形県教育委員会 1990 「川口遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第 151 集
 山形県教育委員会 1996 「山形県中城館遺跡調査報告書」 第 2 集（村山城）
 山形県教育委員会 2001 「分布調査報告書（27）」 山形県埋蔵文化財調査報告書第 201 集
 山形県教育委員会 2011 「分布調査報告書（37）」 山形県内重要遺跡確認調査報告書（3）最上川関連遺跡確認調査報告書（4）押出道路確認調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第 214 集
 山形県教育委員会 2012 「分布調査報告書（38）」 山形県埋蔵文化財調査報告書第 215 集
 山形県教育委員会 2013 「分布調査報告書（39）」 山形県内重要遺跡確認調査報告書（5）押出道路確認調査報告書「山形県埋蔵文化財調査報告書第 216 集
 言智告書第 215 集
 財團法人山形県埋蔵文化財センター 2011 「年報 平成 22 年度」
 財團法人山形県埋蔵文化財センター 2012 「作野遺跡第 3 次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書 205 集
 公益財團法人山形県埋蔵文化財センター 2012 「年報 平成 23 年度」
 公益財團法人山形県埋蔵文化財センター 2013a 「年報 平成 24 年度」
 公益財團法人山形県埋蔵文化財センター 2013b 「北原 2 遺跡第 1・2 次北原 4 遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書 207 集
 公益財團法人山形県埋蔵文化財センター 2014a 「森の原遺跡第 3 次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書 211 集
 公益財團法人山形県埋蔵文化財センター 2014b 「羽黒神社西道路発掘調査説明会資料」
 橋山尚男・晋田慶信・伊藤清郎・渡辺 信 1998 「山形県の歴史」 駿史 6 山川出版
 橋山尚男監修 2003 「図説 村山の歴史」 郷土出版社
 橋山尚男監修 2008 「決定版 村山あるさと大百科」 郷土出版社

III 調査の成果

1 調査の概要

本遺跡は、平成 22 年度に第 1 次調査、平成 23 年度に第 2 次調査を実施し、第 1 次調査は 4,500 m²、第 2 次調査は 200 m²で合わせて 4,700 m²の範囲で調査を行った。A～C 区で検出した遺構は、溝跡、土坑、柱穴などである。

なお、遺構を半裁し堆積状況を確認した上で遺構の可能性が低いと判断したものについては遺構の位置や平面図を掲載していない。また今回の調査で検出した遺構からの出土遺物は少量であり、遺構の時期特定には至っていない。掲載した遺物のほとんどは遺構外出土である。以下に調査区・遺構毎に詳細を述べる。

2 A 区の遺構

A 区の調査面積は 3,700 m²である。遺構番号は、1～275 を登録した。本調査で遺構の検出が多い地区で溝跡、柱穴などを検出した。また梅雨の降雨により調査区内は度々全面冠水し、遺構検出時には困難をきたした。

基本層序は、北壁と西壁の 2 面を記録した（第 13 図）。北壁の層序は、1～3 層で設定した。1 層は黒褐色シルトの耕作土である。2 層は黒色シルトで、3 層は黄褐色粘土で地山となる。西壁の層序は、1 層は北壁同様、黒色シルトの耕作土で 2 層以下は黒色シルトを主体とし、7 層は黄褐色砂質シルトの地山である。耕作土直下の黒色シルト層を遺構検出面とした。北壁と西壁とでは、高低差は 30cm あり、南から北へなだらかに高くなっている。

A 溝 跡

検出した溝跡は、10 条を数え、そのほとんどが A 区西側からの検出である。土層は主に黒色シルトを基調とし、深さは 5～20cm を測る。また、数条の溝は北西方向を主軸としている。

SD10・11・12 溝跡（第 14 図）

SD10・11・12 は、A 区 CB3499-7300～CB3499-

7606 の範囲に位置する。重複関係は、SD12 が SD10・11 に切られる関係を持つ。SD10 は、検出長約 12m、幅約 0.3m、深さは 6～10cm を測る。SD11 は、検出長約 9.5m、幅約 0.2m、深さは 6～10cm を測る。SD12 は、検出長約 7m、幅約 0.9m、深さは 6～10cm である。それぞれの土層は SD10・11 は黒色シルトが主体の単層であるが、SD12 は黒色シルトと暗オリーブ褐色の 2 層であり、土層の形状はそれぞれ浅い皿状を呈している。

SD113・114・172 溝跡（第 15 図）

SD113・114・172 は A 区の中央部に位置する。SD113 は 検出長 約 12m、幅 約 0.3m、深さ 6cm、SD114 は 検出長 約 25m、幅 約 0.4～0.6m、深さ 10～14cm、SD172 は 検出長 約 34m、幅 約 0.3m、深さ 8～18cm を測る。土層は、SD113・114 は黒色シルトを主体とする単層または 2 層である。SD172 は上層が黒色シルト、下層は地山由來の黄褐色粘質シルトである。

なお、SD113・172 は、屈曲部分を境とし、番号を振り分けている。

SD149・187・228・235 溝跡（第 16 図）

これらの 4 条の溝跡は、A 区北西隅に位置する。CB3499-8000～CB3499-8503 の範囲に位置する。重複関係は、SD228 が SD149・187・235 に切られる。SD149 は 検出長 約 21m、幅 約 0.2～0.6m、深さ 6～10cm を測る。SD187 は、検出長 約 8m、幅 約 0.3m、深さは 8cm である。SD228 は、検出長 7.5m、幅 約 0.3～0.45m、深さ 6～18cm を測る。SD235 は、検出長 約 20m、幅 約 0.3～0.5m、深さ 8～20cm を測る。

SD187・228 の土層は黒色シルトの単層で、SD149 は暗オリーブ褐色シルトと明黄褐色シルトの 2 層である。SD235 は 黑褐色土層を主体とし、上層はシルト層、下層は粘質シルト層である。

B 柱穴・ピット

検出した柱穴は、約 60 基である（第 14～20 図）。その中には、土層の堆積状況から柱痕跡を確認できるも

の、また柱穴と考えられるが判然としないビットが確認された。明確に柱痕跡と確認できるものは柱穴全体の約10%程度であり、掘立柱建物跡などの建物を構成するまでには至らなかった。柱穴の大きさは、約25～40cmの値が大半を占め、大きいもので約50～70cmの値を示す。深さは約10cm～20cm程度であり、深いもので約30cmの値を示す。断面形は壁面が緩やかに立ち上がり逆台形を呈するもの、壁面がやや外傾するもの、壁面がほぼ垂直に立ち上がり、底面が丸みを持つU字型を呈するものが確認できる。覆土は黒色シルト・黒褐色シルトが主体である。時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、柱穴の形状などから古代に帰属するとみなしたい。

柱穴の詳細については表3の柱穴観察表を参照されたい。

3 B区の遺構

B区は、A区から北に約90m離れた調査区で、調査面積は800 m²である。検出した遺構は、土坑、柱穴などで遺構番号は1001～1078を登録した。遺構の分布域は主に南側に集中している。

基本層序は、東壁を記録した（第13図）。層序は、1～5層で設定し、土層は黒色シルト（1～3層）・暗褐色シルト（4・5層）が主体であり、A区同様、5層以下は黄褐色シルト層で地山である。

A 土 坑

検出した土坑は、SK1002・1058・1065・1073・1075の5基である（第21図）。平面形は、SK1002は梢円形で長径70cm、短径60cm、深さは12cmを測る。SK1058・1065・1073・1075は長方形の土坑で、長径2～4m、短径0.6～1.6m、深さ12～20cmを測る。覆土はそれぞれ黒色シルト・黒褐色シルトを基準としている。A区同様、遺構から遺物が出土していないため遺構の時期特定には至っていない。

また、SK1058・1065・1073・1075土坑は堆積状況から一気に埋められたと考えられ、墓壙の可能性が考えられることから、サンプルを採取し土壤理化学分析の業務委託を行った。その結果を第IV章に掲載しているので参照されたい。

B 柱穴・ビット

検出した柱穴・ビットは6基確認され、堆積状況を確認したところ柱痕跡を確認することはできなかった。平面形は、円形を呈し、長径32～42cm、短径26～40cm、深さ8～16cmを測る。覆土は、黒色シルト・暗褐色シルトを基調としている。

A区同様、柱穴の詳細については表3の柱穴観察表を参照されたい。

4 C区の遺構

C区は、平成23年度に第2次調査として調査を行った地区であり、B区の北隣の調査区である。調査は、200 m²を対象に実施した。

基本層序は、南壁を記録した（第13図）。土層は、1～6層で設定した。1層は黒褐色細砂で耕作土で孔隙が多く壁面が崩れやすくなっている。軽度の剥落が見受けられた。2層は黒色細砂混じりシルト（黒ボク土）径0.2～1mm程度の鉄鉢を多く含み、約10mm程度の孔隙が確認できる。下部は、グライ化していた。3層は暗褐色細砂混じりシルトで漸移層である。4層は明褐色細砂・軽石混じり細砂シルトで層界で上部にグライ化した黒ボク土が混じり、部分的に鉄鉢が集中する。5層は明黄褐色シルトで鉄鉢を斑状に含む。6層は浅黄色細砂混じり粘土で5層の鉄が溶解し層界で混じり、下部に鉄鉢を帶状に含む。

A 倒木痕

検出遺構は倒木痕2基（SK1079・1080）のみの検出であった（第22・23図）。長径は約3.2～3.3m、短径約2.7～3.2m、深さ70～80cmを測る。覆土は黒色細砂シルト、褐色系細砂シルト、地山由来の黄褐色粘土を基準とする。堆積状況から共に西方へ倒木した事が確認され、またSK1080からは瀬戸美濃の陶器小皿（26）が出土している。この事から樹木が倒木したのは中世と考えられる。SK1079から遺物は出土していないため時期特定には至っていない。

5 出土遺物

A 概 要

本遺跡から出土した遺物は、第1・2次調査合わせて2箱（文化財認定箱数）である。出土したその半数以上が近世・近現代陶器で、僅かながら土師器・須恵器、金属製品、石製品が出土している。

なお、31～49は写真図版のみの掲載となる。表4土師器・須恵器観察表、表5・6陶器観察表、写真図版13を参照されたい。

B 平安時代の遺物

当該期に比定される遺物は、A区のみの出土であり、一部遺構から出土しているが、大半は遺構外出土である（第24図、表4、写真図版10・13）。土師器・須恵器の出土は合わせて5点である。

1は、ロクロ成形による上師器環の体部である。近現代のSG74池跡から出土した（第8図）。2は、須恵器環の体部である。3は、須恵器體部下半にあたる。31は、土師器環で32は土師器であるが小破片であるため、器種は不明である。

1～3・31・32の時期であるが、いずれも破片であるため時期特定が難しいが、平安時代と考えられる。

C 中近世の遺物

出土遺物は、瀬戸・美濃系陶器、肥前系磁器、生産地不明陶器、銭貨である。以下に生産地別にまとめて記述する。

(1) 瀬戸・美濃系陶器（第26図、表6、写真図版12）

出土数は、1点（26）のみである。器種は小皿で、灰釉を施す。時期は、中世と考えられる。

(2) 肥前系磁器（第25図、表6、写真図版10・11・13）

出土数は、10点である。器種は碗（10・11・12・19・39）、染付筒型碗（13・14）、皿（15・43・46）である。

10は、外面に草花文が施され、時期は17世紀後半から18世紀代と考えられる。11は、外面に雪輪梅木文が描かれるくらわんか碗で、時期は18世紀代と考えられる。12は、外面に文様を施し時期は18世紀と考

えられる。13は、見込みにコンニャク印判と考えられる五弁花を施し、時期は18世紀から19世紀と考えられる。14は、外面に半菊文が施され、時期は18世紀後半から19世紀前半と考えられる。15は、内面に二重格子文が施される。時期は19世紀代と考えられる。19は、外面に二重網目文が施されるくらわんか碗である。時期は18世紀代である。

39は、内外面共に文様を施すが、詳細は不明である。43は、内面に草花文を施し、底面にはハリササエが見られる。39・43共に19世紀と考えられる。46は、B区SX1036性格不明遺構から出土し（第11図）、内面に文様を施すが、詳細は不明である。時期は18世紀と考えられる。

(3) 生産地不明陶器（第24図、表5・6、写真図版10・13）

8点を掲載した。器種は、擂鉢（4～6・35）、鉢（7）碗（33・34）、器種不明（38）である。

4～6は、内外面共にロクロ成形で内面に鉢目が付される。4は擂目が粗く、5・6は、密である。3個体共に生産地は不明であるが、4・5は18世紀から19世紀、6は19世紀と考えられる。

7は、内外面に灰釉を施し、漆接ぎが見られる。時期は近世と考えられる。

33は18世紀頃、34は近世と考えられる。35は、鉄釉を施し、時期は近世と考えられる。38は、外面に鉄釉、内面には灰釉を施す。器種特定には至っていないが、時期は19世紀以降と考えられる。

(4) 生産地不明磁器（第26図、表6、写真図版10～13）

6点を掲載した。器種は碗（20・25・40・41）、皿（27）、瓶（48）である。

20は、外面に草花文を施す。時期は18世紀から19世紀代と思われる。25は、外面の文様が不明であるが、内面は圓線を施す。時期は19世紀代と考えられる。27は、型打ち成形による白磁角皿で、時期は幕末から明治と考えられる。

40は、外面に雷文、41は外面に草花文、48は外面に文様を施すが詳細は不明である。3個体共に時期は19世紀代と考えられる。

(5) 銭貨（第26図、表7、写真図版12）

29は、江戸時代から幕末まで広く流通していた寛永通宝である。裏面は鋳が進んでいるため、内容は確認で

きないが表面の字体から 1697 年以降鋳造の新寛永と考えられる。

D 近現代の遺物

出土遺物は、生産地不明陶磁器、石製品である。以下に詳細をまとめて記述する。

(1) 生産地不明陶器（第 24 図、表 5・6、写真図版 10・13）

出土数は 6 点である。器種は土管（8・9・45）、蓋（36）、急須（37）、器種不明（49）である。8・9 は、SX73 性格不明遺構から出土した（第 8 図）。8 は、外面に横位の沈線が 8 条施される。時期は共に近代以降と考えられる。

36 は、ロクロ調整で胎土・焼成共に良好である。近代に含めたが、近世に遡る可能性も考えられる。37 は、型打ち成形による陶器急須で時期は近代と考えられる。45 は、破片であるため判然としないが陶器土管と考えられ、時期は近代以降と考えられる。49 は、C 区北壁の覆土 1 層から出土した。器種は不明であるが、鉄軸を施す。時期は近代以降と考えられる。

(2) 生産地不明磁器（第 25・26 図、表 6、写真図版 11～13）

出土数は 9 点を数え、器種は、皿（16～18・22～24・47）、碗（21・42）である。

16 は、内面に型紙摺絵で文様を施し、見込に目跡が確認できる。時期は近代と考えられる。17 は、内面に

銅版転写による銅縁釉の文様を施す。18 は、蛇ノ目凹型高台の磁器皿で見込に目跡があり、内面には棲闇山水文を施す。時期は 17・18 共に近代と考えられる。22 は、内外面共に型紙摺絵による文様を施す。21 は、型押し成形による磁器碗である。外面に蓮弁文を施し、また外面に鉄軸を施す。時期は近代と考えられる。23・24 は内面に銅版転写による文様を施し、さらに 23 には口紅を施す。共に時期は近代と考えられる。

42 は、外面に松竹梅と思われる文様を施す。47 は、内面に銅版転写による文様を施す。時期は共に近代と考えられる。

(3) 生産地不明瓦質土器（表 6、写真図版 13）

出土数は 1 点（44）である。器種は焜灼で、ナデ調整を施し、胎土・焼成は良好である。近代としているが、近世に遡る可能性もある。

(4) 石製品（第 26 図、表 8、写真図版 12）

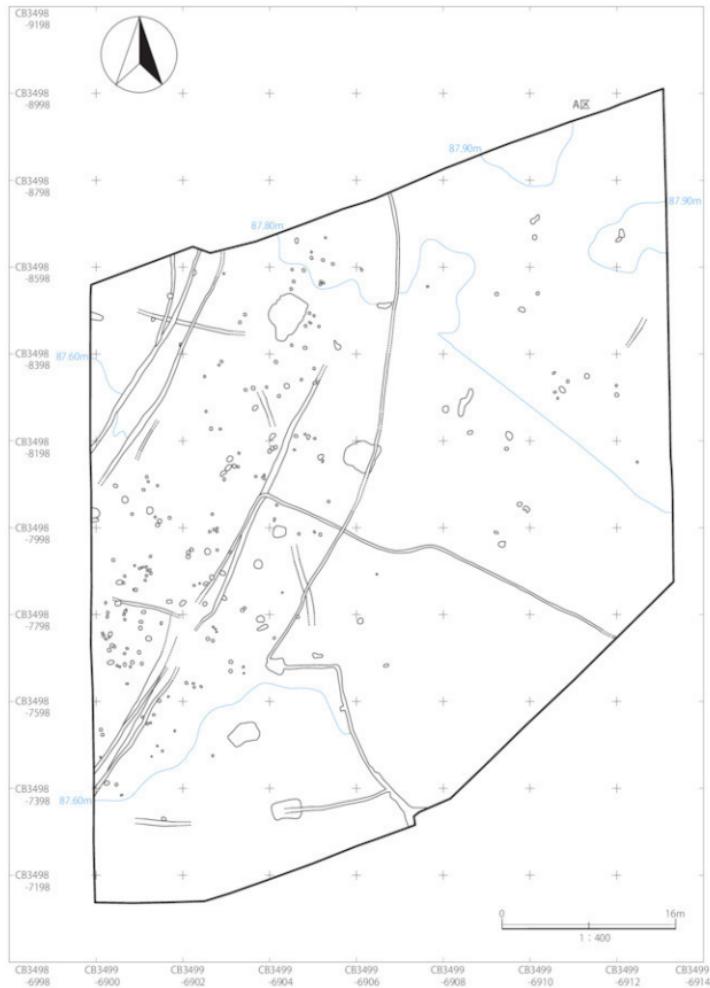
30 は、ろう石製の石筆である。上下共に鉛筆状に使用した痕跡が確認でき、残存値は約 26mm を測る。石筆は、明治初期の西洋式教育制度の取り入れを行った時期と同時期に持ち込まれた（日本民具学会 1997）。本来、石板とセットで筆記用具として使用されていたと考えられている。

しかし、本遺跡では石板の出土は確認されていない。明治時代のもとと考えられる。

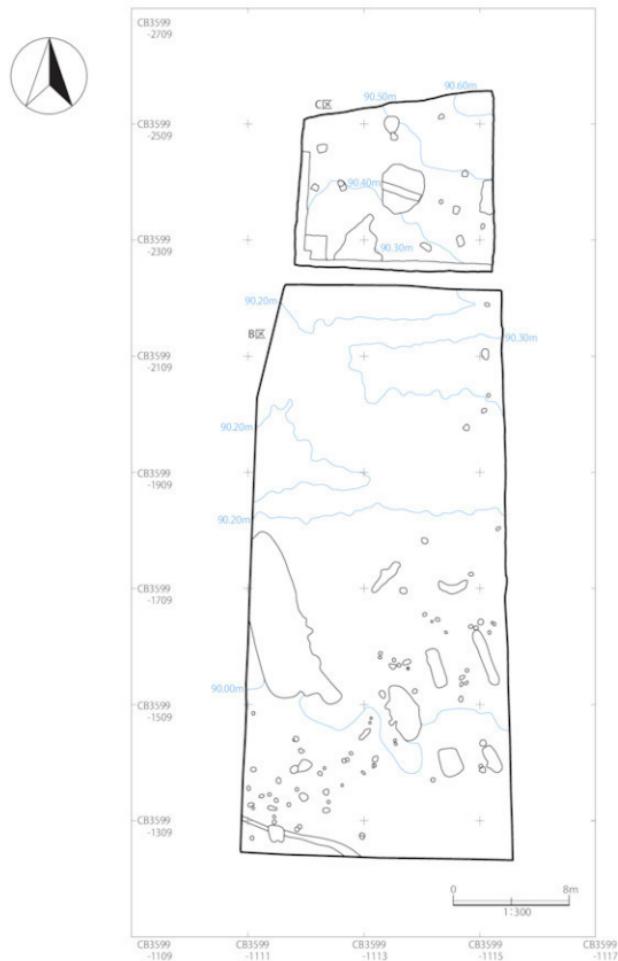
引用・参考文献

- 中橋掬泉 1958 「新撰 古鏡大鑑」 大文館書店
日本民具学会 1997 「日本民具辞典」 株式会社ぎょうせい

III 調査の結果



第4図 調査区全体図 (1)

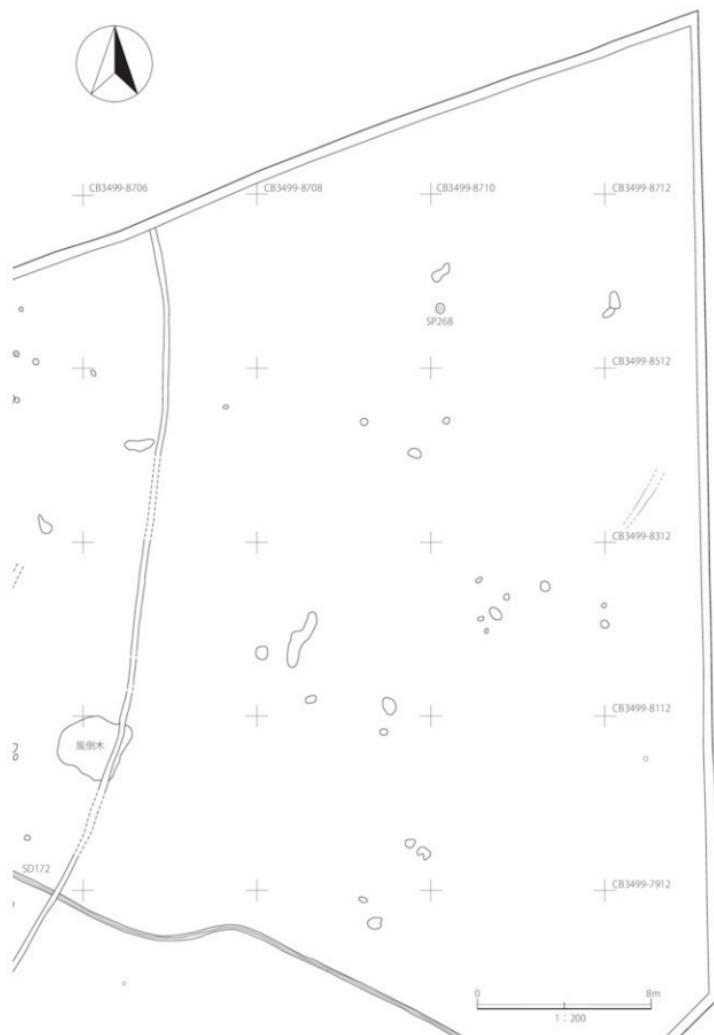


第5図 調査区全体図 (2)

III 調査の成果

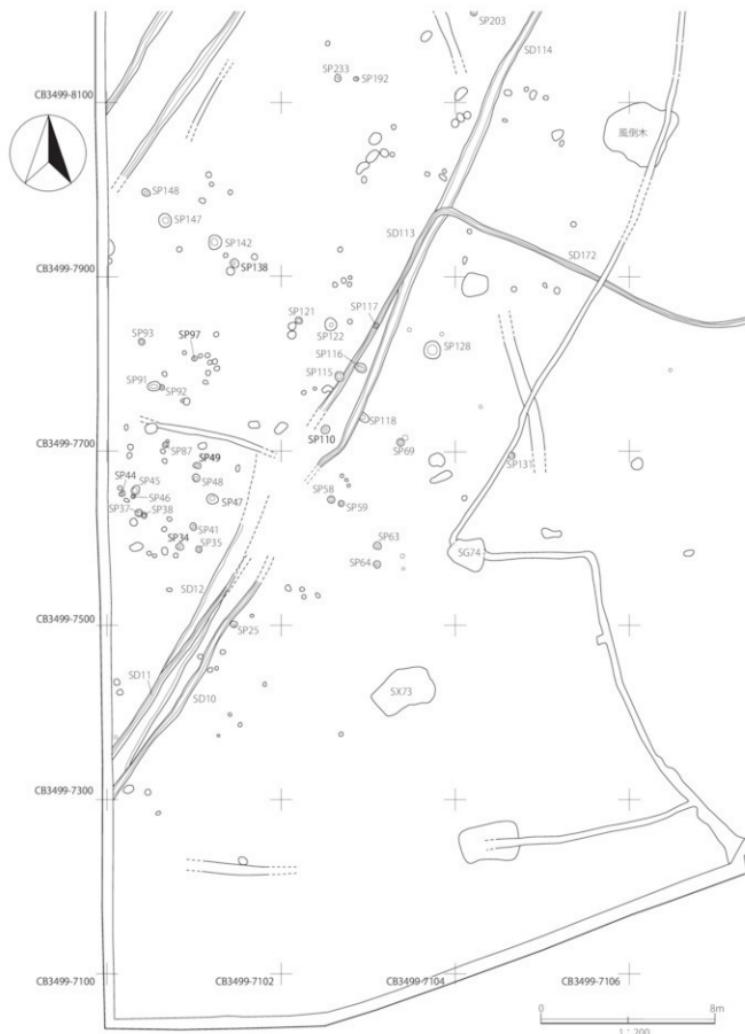


第6図 A区遺構配置詳細図 (1)

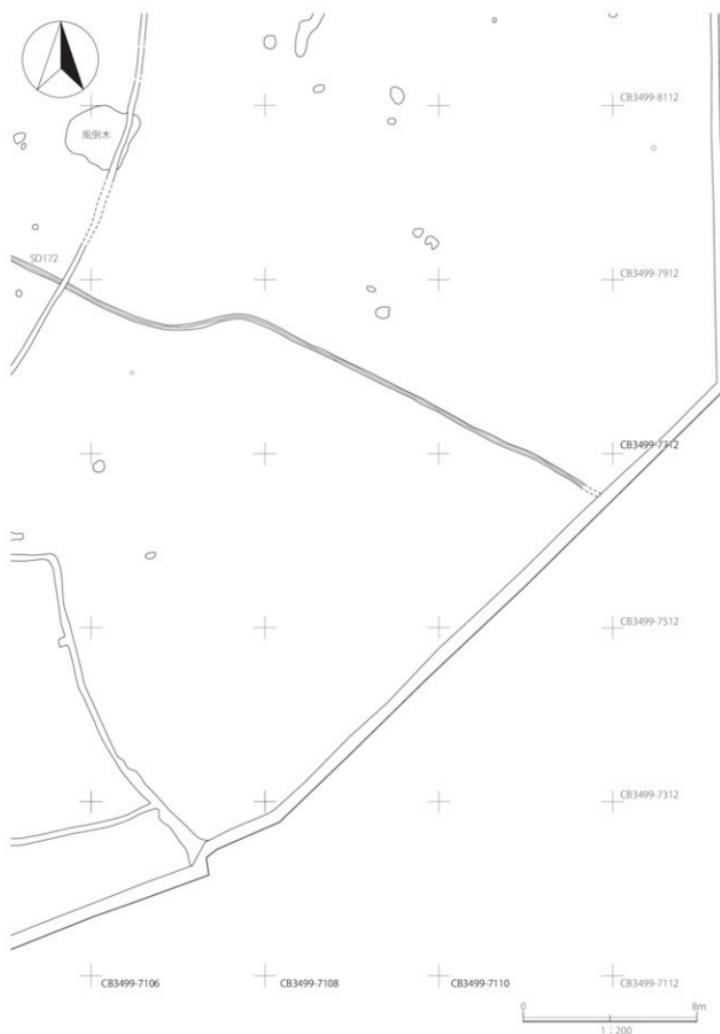


第7図 A区造構配置詳細図(2)

III 調査の成果

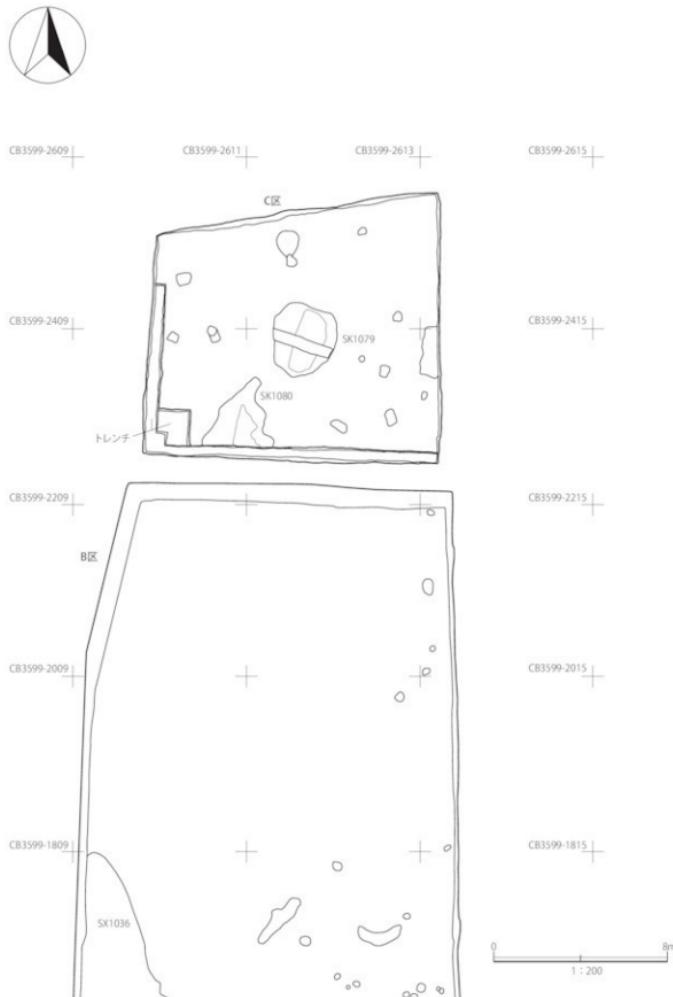


第8図 A区遺構配置詳細図 (3)

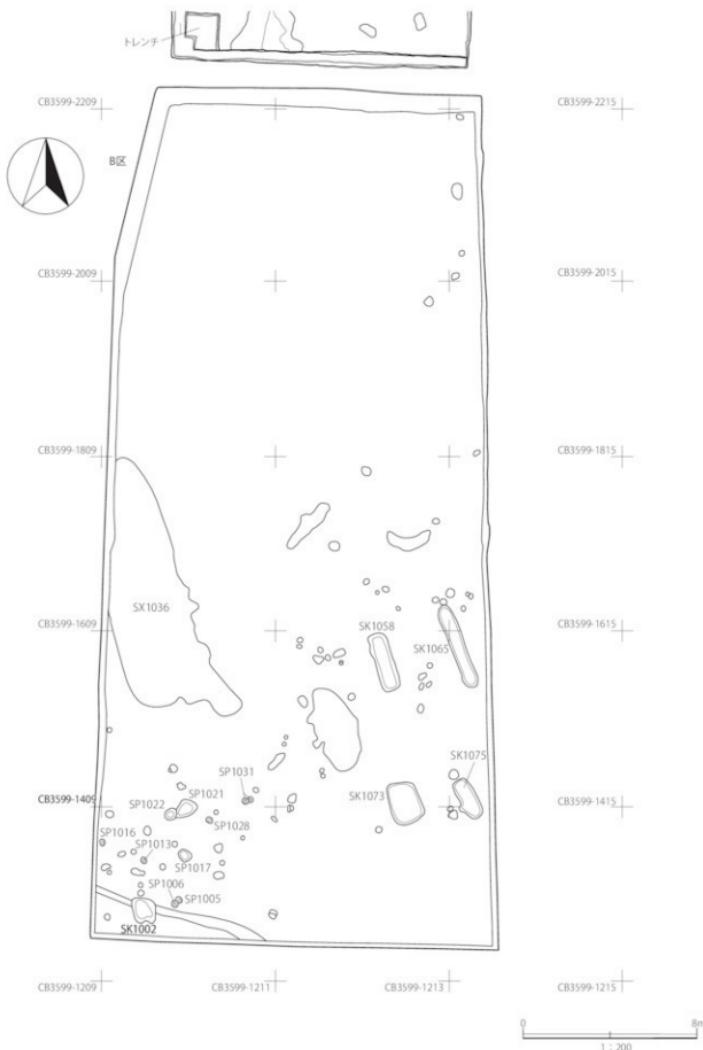


第9図 A区遺構配置詳細図(4)

III 調査の成果

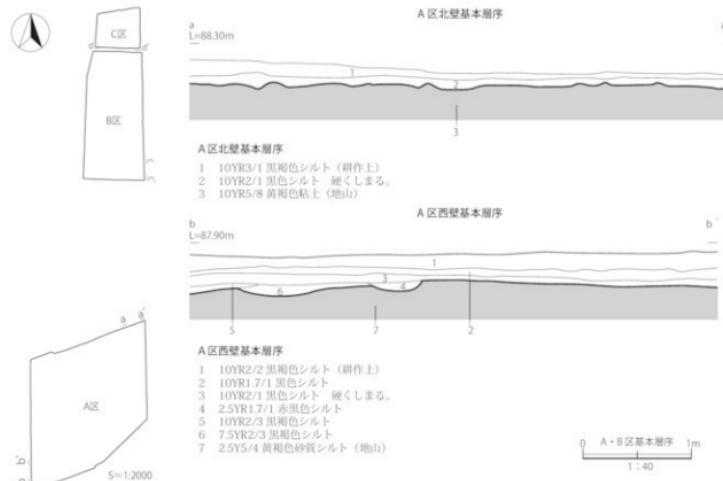


第10図 B+C区遺構配置詳細図(1)

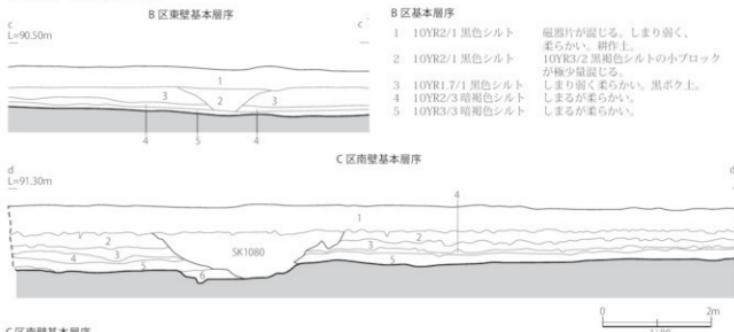


第11図 B・C区遺構配置詳細図(2)

III 調査の結果



第12図 基本層序位置図

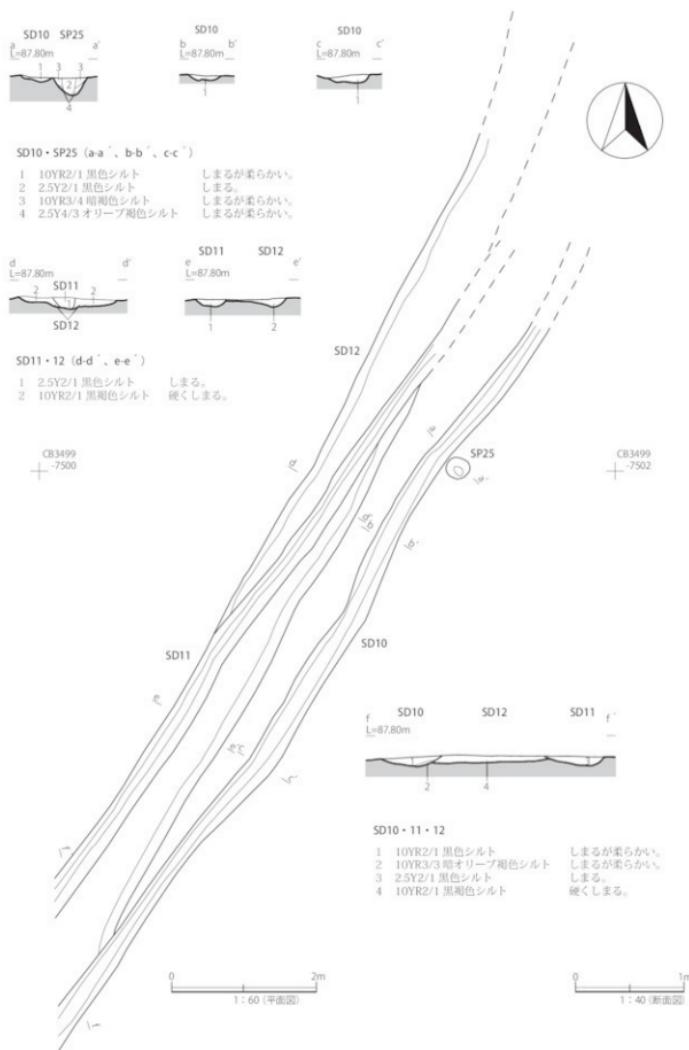


第13図 A～C区基本層序

1 5YR2/1 黒褐色細緻まじり
2 7.5YR1.7/1 黒色細緻まじりシルト・黒ボク
3 7.5YR3/4 暗褐色細緻まじりシルト
4 7.5YR5/8 明褐色輕石まじり細緻シルト
5 10YR6/8 明黄色褐色シルト
6 2.5YR7/3 浅黄色細緻まじり粘土

しかし、中層は湿り気があり、しまりもややある。下部が孔隙（2～10mm）が多くみられる。上中に0.2～10mm程の粗鉄を含む。腐植物質は、根や茎が残る程度。細緻は均一に散っている。層界は不規則な波状だが、一部均一な波状が保存する。層間は3～4cm判然である。
しまりやや強。粘性弱。黒ボク上。湿り気強。1～10mm 強の孔隙あり。一部粗鉄が混じる。
腐植は根が少量残る程度。0.2～1mm程の粗鉄を多く含む。2～10mm 程のものは含むが少量。層界は不規則な凸凹の形状だが、一部均一な波状もある。下部がグラウ化しており、層界が漸んである（下層3～6cm）。
しまり強。粘性やや強。黒ボクグラウ上。澆灌層。湿り気強。2～10mm 程の孔隙有。孔隙内に黒色土が残る。粗鉄は0.2～0.5mm 程で、全体に散る。層界は不規則で凹凸有。下部に漸度。
しまり強。粘性中。漥度（崩壊）で土中にグラウ化した粗鉄が混じる。部分的に粗鉄が集中し、粗鉄を含む。形狀は不規則な円錐形。下部に粗鉄が集中する。
しまりやや強。粗鉄中、湿り気多。10～50mm 程度の孔隙が全体に散る。層界はやや判然としている。形状は平坦に近い。上中層には粗鉄が斑状に散る。
下部に粗鉄が集積している。5の鉄が溶解し、層界で混じる。疑似堆疊。孔隙は2mm のもののが少量有。

第13図 A～C区基本層序

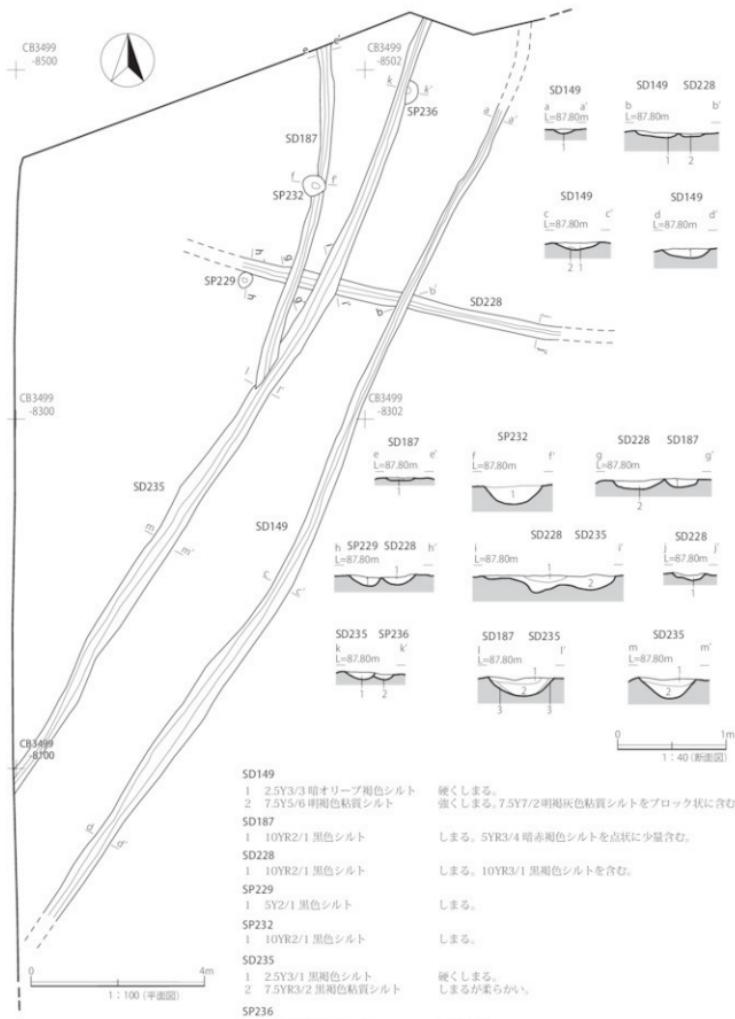


第14図 SD10・11・12溝跡、SP25柱穴

III 調査の結果



第15図 SD113・114・172溝跡、SP115～118・131・208・209柱穴



第16図 SD149・187・228・235溝跡、SP229・232・236柱穴

III 調査の結果



SP34

- 1 5Y2/1 黒色シルト しまる。
- 2 2.5Y4/2 オリーブ黒色シルト しまる。
- 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト 硬くしまる。

SP37・38

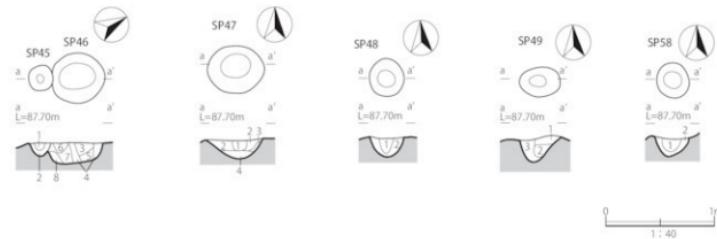
- 1 5Y2/1 黒色シルト しまる。
- 2 2.5Y4/1 黄灰色シルト 硬くしまる。
- 3 5Y2/1 黒色シルト しまる。
- 4 2.5Y3/3 明オリーブ褐色シルト しまる。
- 5 2.5Y3/1 黒褐色シルト しまる。
- 6 10YR4/4 褐色シルト しまる。

SP35

- 1 5Y2/1 黒色シルト しまる。
- 2 2.5Y4/1 黄灰色シルト 硬くしまる。

SP41

- 1 2.5Y3/1 黑褐色シルト しまる。
- 2 10YR4/4 褐色シルト 硬くしまる。



SP45・46

- 1 10YR3/1 黑褐色シルト しまる。
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト しまる。
- 3 2.5Y4/3 黒色シルト しまるが柔らかい。
- 4 2.5Y4/3 明オリーブ褐色シルト しまる。
- 5 10YR3/4 褐色シルト しまる。
- 6 10YR4/1 褐色シルト しまるが柔らかい。
- 7 10YR2/3 黑褐色シルト しまる。10YR4/4 褐色シルトを斑状に多く含む。
- 8 10YR4/3 にぶい 黄褐色シルト しまる。2.5Y4/6 オリーブ褐色シルトを斑状に含む。

SP47

- 1 10YR2/1 黒色シルト しまる。
- 2 10YR4/1 褐色シルト しまる。
- 3 10YR4/3 にぶい 黄褐色シルト しまる。
- 4 10YR5/6 黄褐色シルト しまるが柔らかい。

SP48

- 1 10YR3/1 黑褐色シルト しまる。I ~ 3mm の砂粒を全体に少量含む。
- 2 10YR4/3 にぶい 黄褐色シルト しまるが柔らかい。

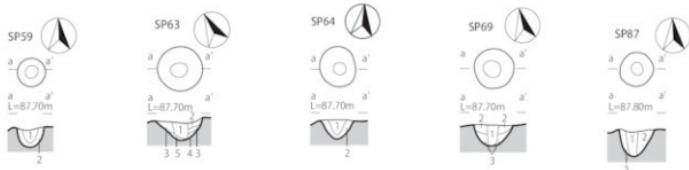
SP49

- 1 2.5Y4/2 明灰黃色シルト しまる。
- 2 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト しまる。10YR2/1 黑色シルトを斑状に少量含む。
- 3 2.5Y2/1 黑色粘質シルト しまるが柔らかい。

SP58

- 1 2.5Y2/1 黒色シルト しまる。10YR4/4 褐色シルトを斑状に含む。
- 2 2.5Y5/4 黄褐色砂質シルト しまる。2.5Y3/3 明オリーブ褐色粘質シルトを斑状に含む。

第17図 SP34・35・37・38・41・44・45・47～49・58柱穴

**SP59**

- 1 2.5Y2/1 黒褐色シルト
2 2.5Y5/6 黄褐色シルト
- 硬くしまる。
しまる。2.5Y3/3 帽オーピーブ褐色粘質シルトを斑状に含む。

SP63

- 1 2.5Y3/1 黒褐色シルト
2 2.5Y4/3 オーピーブ褐色シルト
3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
4 10YR5/8 黄褐色シルト
5 10YR3/4 黄褐色シルト
- 硬くしまる。
しまるが柔らかい。
しまるが柔らかい。
しまるが柔らかい。

SP64

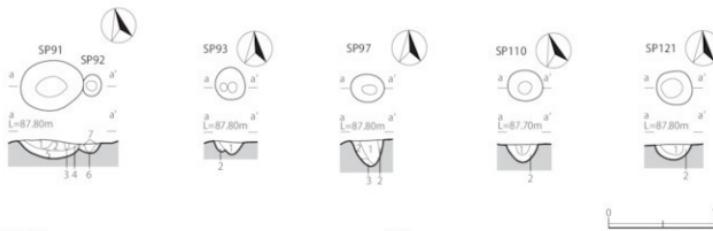
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト
2 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
- しまる。10YR4/4 褐色シルトを斑状に多く含む。
硬くしまる。2.5Y5/6 黄褐色シルトを斑状に多く含む。

SP69

- 1 2.5Y2/2 オーピーブ黒褐色シルト
2 10YR3/3 帽褐色粘質シルト
3 2.5Y5/6 黄褐色シルト
- 硬くしまる。
しまるが柔らかい。
しまる。2.5Y3/1 黑褐色シルトをブロック状に含む。

SP87

- 1 10YR2/2 黒褐色シルト
2 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
- しまる。10YR4/4 褐色シルトを斑状に多く含む。
硬くしまる。2.5Y5/6 黄褐色シルトを斑状に多く含む。

**SP91 + 92**

- 1 7.5Y2/1 黒褐色シルト
2 10YR3/3 帽褐色シルト
3 10YR3/1 黑褐色粘質シルト
4 10YR4/4 カンゴルト
5 2.5Y4/3 帽オーピーブ褐色砂質シルト
6 10YR2/1 黒褐色シルト
7 10YR4/4 褐色シルト
- しまるが柔らかい。
しまる。
しまる。
しまる。
硬くしまる。
しまる。
しまる。

SP93

- 1 2.5Y3/1 黑褐色シルト
2 10YR4/4 褐色シルト
- しまる。
しまる。

0 1 m
1:40

SP97

- 1 2.5Y3/1 黑褐色シルト
2 2.5Y3/3 帽オーピーブ褐色シルト
3 2.5Y4/4 オーピーブ褐色粘質シルト
- しまる。
しまる。
しまる。2.5Y3/3 帽オーピーブ褐色シルトを斑状に含む。

SP110

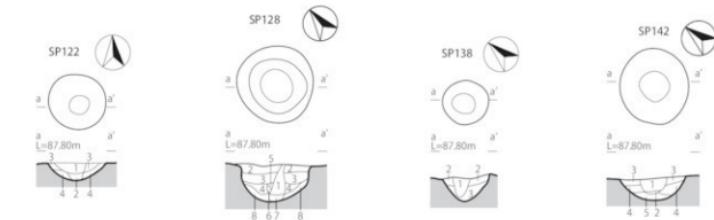
- 1 10YR2/1 黑褐色シルト
2 10YR4/4 褐色シルト
- しまる。
しまる。

SP121

- 1 2.5Y2/1 黑褐色シルト
2 2.5Y4/3 オーピーブ褐色シルト
- 硬くしまる。10YR4/4 褐色シルトを斑状に多く含む。
しまる。

第18図 SP59・63・64・69・87・91～93・97・110・121柱穴

III 調査の結果



SP122

- 1 2SY2/1 黒褐色シルト
 - 2 2.5Y3/3 明オリーブ褐色砂質シルト
 - 3 10YR2/1 黑褐色シルト
 - 4 10YR4/3 にふい黄褐色シルト
- しまる。
2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質シルトをブロック状に少量含む。
硬くしまる。
しまる。2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質シルトを斑状に含む。

SP128

- 1 2SY2/1 黒褐色シルト
 - 2 10YR2/3 黑褐色シルト
 - 3 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質シルト
 - 4 10YR5/8 黄褐色シルト
 - 5 10YR5/4 にふい黄褐色シルト
 - 6 10YR5/4 にふい黄褐色砂質シルト
 - 7 2.5Y7/4 汚褐色粘質シルト
 - 8 10YR5/6 黄褐色シルト
- しまる。
しまる。
しまる。5Y3/3 明オリーブ褐色シルトを帶状及び斑状に多く含む。
しまる。2.5Y3/3 明オリーブ褐色シルトを斑状に多く含む。
しまる。
しまる。
しまる。2.5Y2/1 黒褐色シルトをブロック状に含む。
しまる。

SP138

- 1 5Y3/1 オリーブ黒色シルト
 - 2 10YR4/3 にふい黄褐色シルト
 - 3 10YR5/6 黄褐色シルト
- 硬くしまる。
しまる。
硬くしまる。
- 1 10YR2/2 黒褐色シルト
 - 2 10YR4/2 汚黒褐色シルト
 - 3 10YR4/4 黄褐色シルト
 - 4 2.5Y3/3 明オリーブ褐色シルト
 - 5 10YR5/6 黄褐色シルト
- しまる。
しまり弱く柔らかい。
しまるが柔らかい。
しまる。
しまる。

SP147

- 1 10YR2/1 黒褐色シルト
 - 2 10YR5/4 にふい黄褐色シルト
 - 3 10YR3/2 黑褐色シルト
 - 4 10YR5/3 にふい黄褐色シルト
 - 5 2.5Y5/6 黄褐色シルト
- 硬くしまる。
しまる。2.5Y3/3 明オリーブ褐色シルトを斑状に含む。
しまる。
しまるが柔らかい。
しまり弱く柔らかい。

SP148

- 1 10YR2/2 黑褐色シルト
 - 2 10YR4/3 にふい黄褐色シルト
 - 3 10YR2/3 黑褐色シルト
- しまるが柔らかい。
しまるが柔らかい。
しまるが柔らかい。
- 1 10YR2/1 黒褐色シルト
 - 2 10YR4/4 晴褐色シルト
- しまる。2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトを斑状に少量含む。
しまるが柔らかい。

SP197

- 1 10YR2/1 黒褐色シルト
 - 2 10YR3/3 晴褐色シルト
- しまる。
しまるが柔らかい。

SP148

- 1 10YR2/2 黑褐色シルト
 - 2 10YR4/2 汚黒褐色シルト
 - 3 10YR4/4 黄褐色シルト
 - 4 2.5Y3/3 明オリーブ褐色シルト
 - 5 10YR5/6 黄褐色シルト
- しまる。
しまり弱く柔らかい。
しまるが柔らかい。
しまる。
しまる。

SP192

- 1 10YR2/1 黒褐色シルト
 - 2 10YR4/4 晴褐色シルト
- しまる。2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトを斑状に少量含む。
しまるが柔らかい。



第19図 SP122・128・138・142・147・148・192・197柱穴



SP203

1. 10YR2/1 黒色シルト しまる。
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト しまる。 10YR3/4 灰褐色シルトを斑状に少量含む。

SP204

1. 2.5Y3/1 褐色シルト 硬くしまる。
2. 10YR2/3 黑褐色シルト しまる。 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトを斑状に含む。

SP233

1. 10YR2/1 黒色シルト 硬くしまる。
2. 2.5Y2/2 黑褐色シルト しまる。
3. 2.5Y3/3 灰褐色シルト しまる。

SP205

1. 2.5Y3/1 黒色シルト 硬くしまる。
2. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト しまる。

SP240

1. 2.5Y3/1 灰褐色シルト 硬くしまる。
2. 10YR4/4 褐色シルト しまる。



0
1:40

SP244

1. 2.5Y3/1 黑褐色シルト 硬くしまる。
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト しまるが柔らかい。

SP245

1. 2.5Y3/3 灰褐色シルト 硬くしまる。
2. 10YR4/4 褐色砂質シルト しまる。

SP248

1. 10YR2/2 黑褐色シルト しまるが柔らかい。
2. 10YR5/3 ぶい黄褐色砂質シルト しまる。

SP265

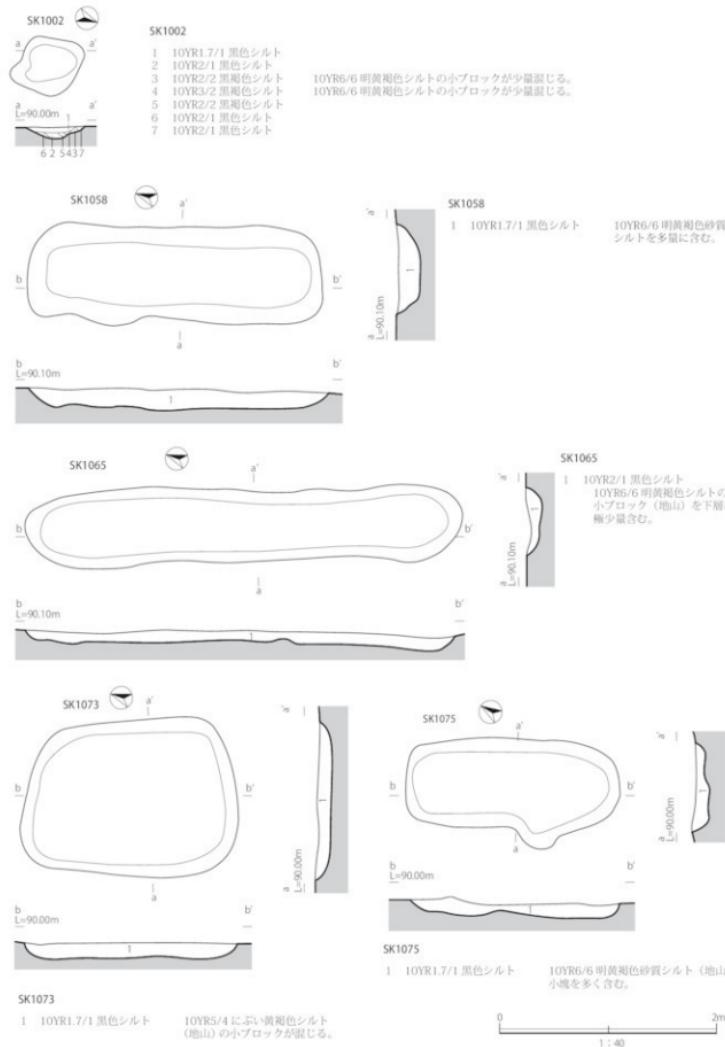
1. 2.5Y3/1 黑褐色シルト しまる。
2. 2.5Y5/6 黄褐色シルト しまる。

SP268

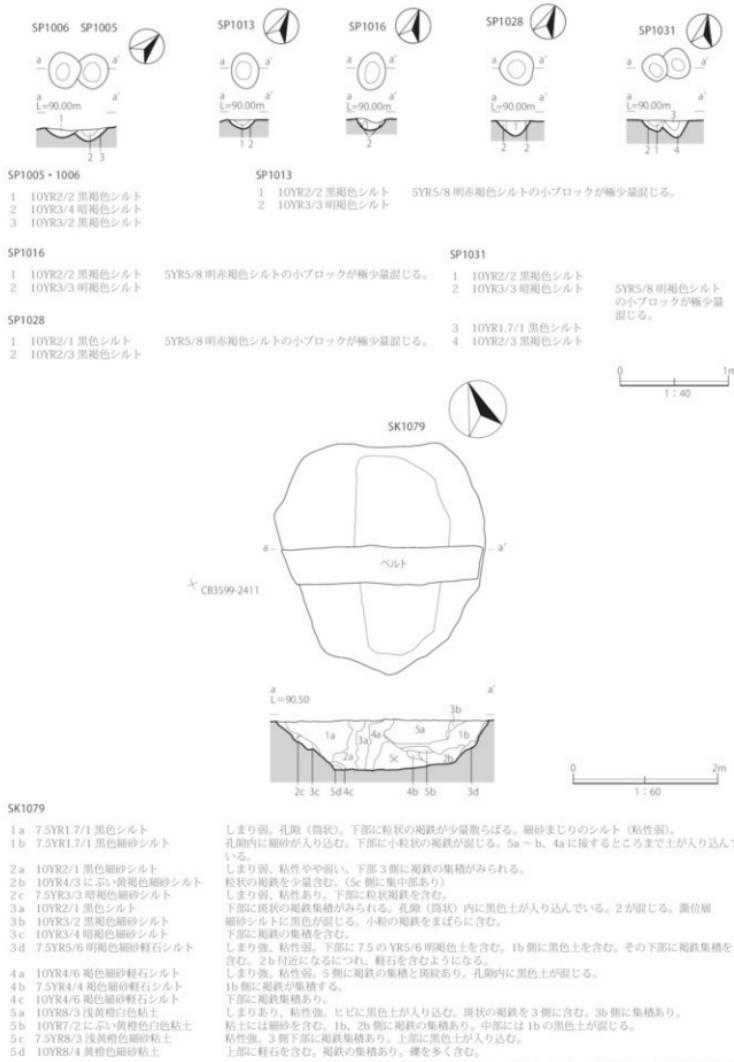
1. 2.5Y3/1 黑褐色シルト 硬くしまる。 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルトを斑状に含む。
2. 2.5Y4/6 オリーブ褐色シルト 硬くしまる。 2.5Y4/2 灰褐色シルトを斑状に多く含む。
3. 2.5Y5/6 黄褐色砂質シルト 硬くしまる。

第20図 SP203～205・233・240・244・245・248・265・268柱穴

III 調査の結果



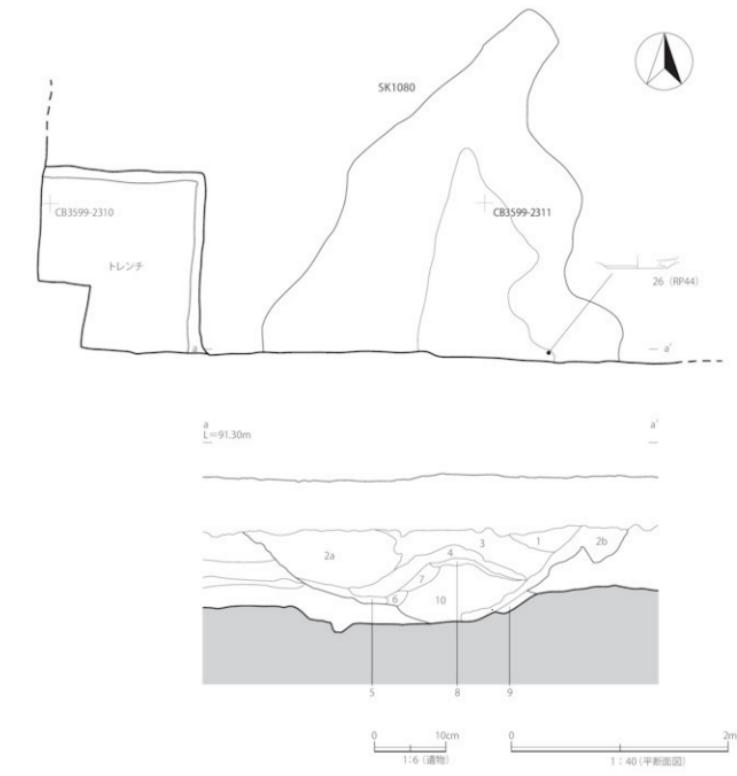
第21図 SK1002・1058・1065・1073・1075 土坑



III 調査の結果

表3 柱穴観察表

因版番号	遺構番号	地区	グリッド	計測値(cm/ ()は残存値)			重複関係 ^a	備考
				長径	短径	深さ		
14	SP25	A 区	CB3499-7501	33	30	16		
	SP34	A 区	CB3499-7500	37	34	20		
	SP35	A 区	CB3499-7501	34	28	13		
	SP37	A 区	CB3499-7600	34	32	10	>SP38	
	SP38	A 区	CB3499-7600	26	(22)	16	<SP37	
	SP41	A 区	CB3499-7600	34	32	10		
	SP44	A 区	CB3499-7600	27	22	13		
	SP45	A 区	CB3499-7600	24	22	14	>SP46	
	SP46	A 区	CB3499-7600	49	47	19	<SP45	
	SP47	A 区	CB3499-7601	52	44	16		
17	SP48	A 区	CB3499-7601	35	21	18		
	SP49	A 区	CB3499-7601	37	22	27		
	SP58	A 区	CB3499-7602	31	27	16		
	SP59	A 区	CB3499-7602	26	16	25		
	SP63	A 区	CB3499-7503	40	39	16		柱痕跡あり
	SP64	A 区	CB3499-7503	37	33	18		
	SP69	A 区	CB3499-7703	36	36	20		柱痕跡あり
	SP87	A 区	CB3499-7700	31	30	23		柱痕跡あり
	SP91	A 区	CB3499-7700	57	46	17	>SP92	
	SP92	A 区	CB3499-7700	20	15	9	<SP91	
18	SP93	A 区	CB3499-7800	30	26	12		
	SP97	A 区	CB3499-7801	30	24	24		
	SP110	A 区	CB3499-7702	32	28	16		
	SP115	A 区	CB3499-7702	55	43	10	>SD113	
	SP116	A 区	CB3499-7702	51	40	14		
	SP117	A 区	CB3499-7803	24	22	17	>SD113	
	SP118	A 区	CB3499-7702	(50)	39	22	<SD114	
	SP121	A 区	CB3499-7802	33	31	14		
	SP122	A 区	CB3499-7802	51	50	16		
	SP128	A 区	CB3499-7803	70	70	34		柱痕跡あり
19	SP131	A 区	CB3499-7604	32	30	22		
	SP138	A 区	CB3499-7901	42	40	22		
	SP142	A 区	CB3499-7901	69	62	20		柱痕跡あり
	SP147	A 区	CB3499-7900	57	55	24		
	SP148	A 区	CB3499-7900	36	30	10		
	SP192	A 区	CB3499-8102	27	24	14		
	SP197	A 区	CB3499-8203	25	22	10		
	SP203	A 区	CB3499-8204	25	24	10		
	SP204	A 区	CB3499-8204	50	48	12		
	SP205	A 区	CB3499-8204	29	28	14		
15	SP208	A 区	CB3499-8205	28	28	6	>SP209・SD114	
	SP209	A 区	CB3499-8205	28	(20)	10	SP208・SP209・SD114	
16	SP229	A 区	CB3499-8402	40	30	9		
	SP232	A 区	CB3499-8401	50	48	17	>SD187	
20	SP233	A 区	CB3499-8102	30	28	10		
	SP236	A 区	CB3499-8402	50	(28)	6	<SD235	
20	SP240	A 区	CB3499-8304	31	30	14		
	SP244	A 区	CB3499-8305	21	20	10		
20	SP245	A 区	CB3499-8305	25	21	12		
	SP248	A 区	CB3499-8404	28	22	11		
	SP265	A 区	CB3499-8505	27	26	15		
	SP268	A 区	CB3499-8510	38	35	14		
	SP1005	B 区	CB3599-1209	32	(24)	11	<SP1006	
	SP1006	B 区	CB3599-1209	39	32	8	>SP1005	
22	SP1013	B 区	CB3599-1309	33	24	9		
	SP1016	B 区	CB3599-1309	34	24	10		
	SP1028	B 区	CB3599-1310	41	40	14		
	SP1031	B 区	CB3599-1510	42	26	16		



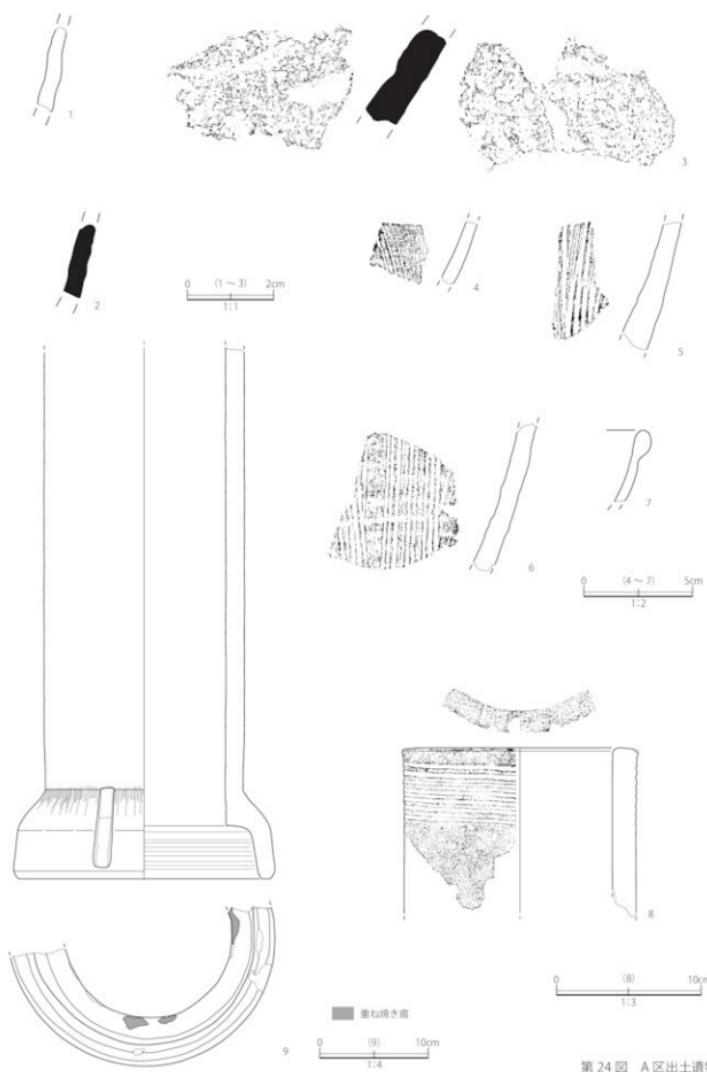
SK1080

- 1 SY2/1 黒色細砂まじりシルト
- 2a IOYR1.7/1 黒色細砂まじりシルト
- 2b IOYR1.7/1 黒色細砂まじりシルト
- 3 7.5YR4/4 淡色細砂・細砂・小礫
- 4 7.5YR6/4 にぶい褐色細砂・粘土質シルト
- 5 10YR2/1 黑褐色シルト
- 6 10YR3/4 暗褐色細砂シルト
- 7 10YR4/6 淡色細石・細砂・粗砂シルト
- 8 2.5YR3/2 黑褐色軽石含むシルト
- 9 2.5YR7/3 淡黄色粘土
- 10 5YR/4 淡黄色粘土

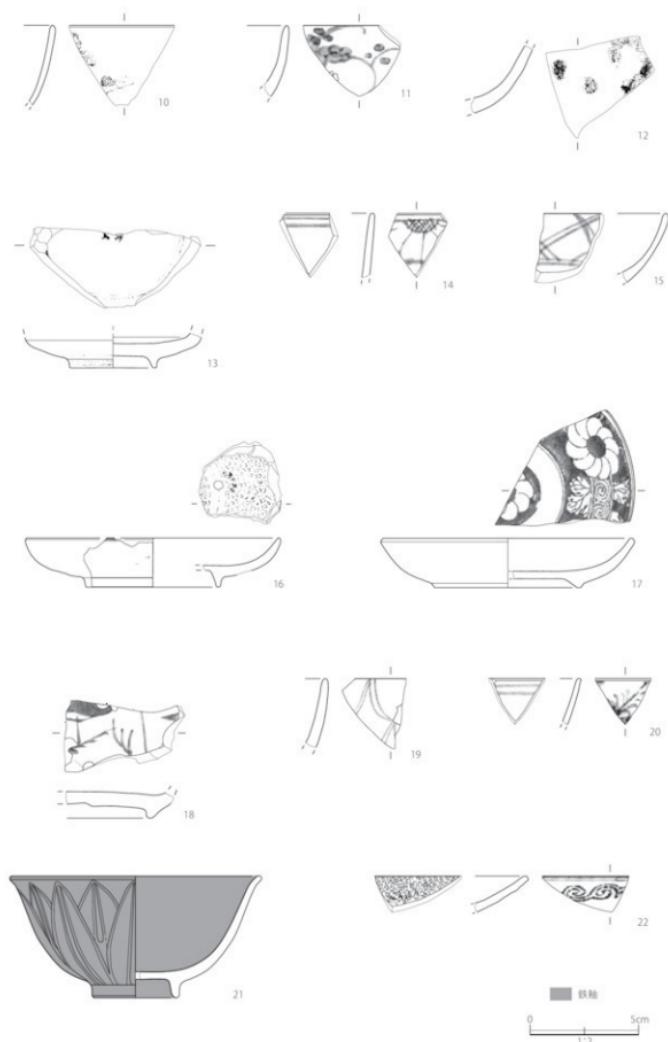
しまり弱。粘性中。下部に粒状の褐鉄が混じる。2mm以上の粒が一部集中。
1～30mmの孔隙有。内部に黒色土が入り込んでいる。粒状の褐鉄を下部に含む。
しまり弱。粘性弱。0.2～2mmの孔隙をまばらに含む。粒状の褐鉄を全体に含む。下部に斑状の褐鉄を含む。
しまり強。粘性中。筒状の孔隙内に黒色土が入り込む。褐鉄は0.2～2mmの粒状で、割合7%前後で広がる。
しまり強。粘性強。褐鉄が斑状なり分散する。φ 1～5mmの孔隙内に黒色土が混じる。
しまり中。粘性弱。孔隙をまばらに含む。下部に粒状の褐鉄が集中する。
しまり弱。粘性強。軽く崩れやすい。下部に褐鉄の集積。上部に黒色土を含んだ孔隙あり。
8層に褐鉄の集積あり。上中に褐灰褐色土を含む。相が残る部分に黒色土を含む。
黒色土が混じる。下部に細砂・粗砂・褐鉄が集積する。
しまり強。粘性強。6に似た質。マンガンを含む。
しまり強。粘性強。上部に褐鉄の現象、集積あり。灰白色土が混じる。

第23図 SK1080 倒木痕

III 調査の成果

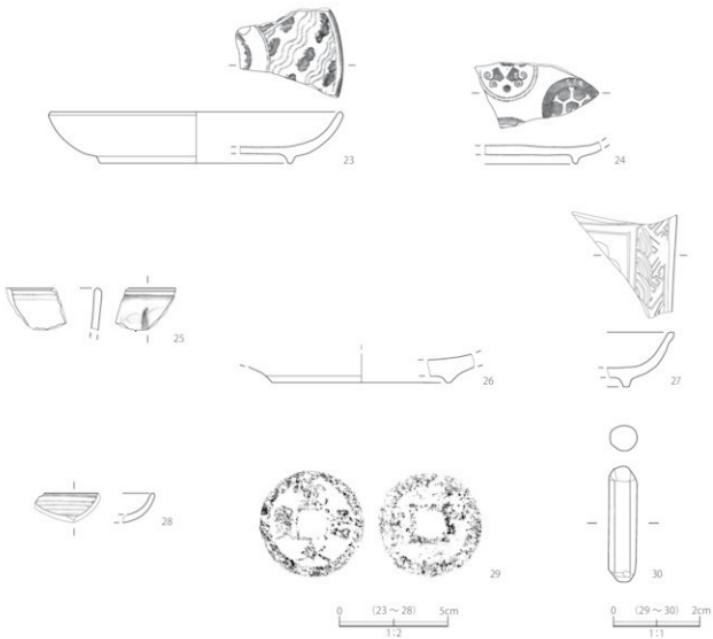


第24図 A区出土遺物



第25図 A・B区出土遺物

III 調査の成果



第26図 B・C区出土遺物

表4 土師器・須恵器観察表

図版 番号	図版 番号	種別 器種	地区	出土地点	計測値 (mm)			調整 内面	底部	胎土・焼成	備考
					口径	底径	器高				
1	10	土師器 环	A区	S674		3.1	口クロ	口クロ		細砂混入・やや良	
2	10	須恵器 环	A区	XO		3.5	口クロ	口クロ		細砂混入・やや良	
24	3	10 須恵器 豊	A区	XO		7.2	口クロ	口クロ		細砂・石英混入	
						タタキ	アテ			やや不良	
31	13	土師器 环	A区	XO			ナデ	ナデ		細砂混入・やや良	
32	13	土師器 不明	A区	XO			ナデ	ナデ		細砂混入・やや良	

表5 陶器観察表

図版 番号	図版 番号	種別 器種	生産地	地区	出土地点	計測値 (mm)			調整 内面	胎土・焼成	文様・釉薬・年代・備考
						口径	底径	器高			
4	10	陶器擂鉢	不明	A区	XO		5.2	ロクロ	鉗目 ロクロ	緻密・良好	細目粗い・18~19C
5	10	陶器擂鉢	不明	A区	XO		5.2	ロクロ	鉗目	緻密・良好	細目密・18~19C
24	6	10 陶器擂鉢	不明	A・B区	XO		8.2	ロクロ	鉗目 ロクロ	緻密・良好	細目密・19C
7	10	陶器鉢	不明	A区	XO		7.6	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	灰褐色・近世か・漆接ぎ
8	10	陶器上巻	不明	A区	SX73		16	ナデ	ナデ	緻密・良好	近現代
9	10	陶器上巻	不明	A区	SX73	228	17	型打ち成形		緻密・良好	近現代

表6 陶磁器観察表

番号	番号	写真 図版	種別	生産地	地区	出土地点	計測値 (mm)			調整	施土・焼成	文様・釉薬・年代・備考	
							口径	底径	器高	器厚	外面	内面	
10	10	磁器碗	肥前系	A区	XO		2.9	口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 (外面) 草花文・17C 後半～18C		
11	10	磁器碗	肥前系	A区	XO		5	口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 (外面) 雪輪文木文・18C くらわんか窓		
12	10	磁器碗	肥前系	A区	XO		6.4	口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 18C		
13	11	磁器染付 筒型瓶	肥前系	A区	XO	(38)	6	口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 (内面) コンニャク印刷か、底部：見込 18～19C		
14	11	磁器 筒型瓶	肥前系	A区	XO		3.4	口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 (外面) 半菊文・18C 後半～19C 前半		
25	15	11	磁器皿	肥前系	A区	XO	4.7	口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 (内面) 二重輪目文・19C		
16	11	磁器皿	不明	A区	XO	(117) (60)	22.8	6.1	口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 (内面) 型紙輪目・見込に目跡・近代	
17	11	磁器皿	不明	A区	XO	(116) (66)	22.5	5.5	口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 (内面) 剥離軸写・鉢縫繩・近代	
18	11	磁器皿	不明	A区	XO		6.7	口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 (内面) 横圓山文式・見込に目跡・近代 蛇ノ目内型高台		
19	11	磁器皿	肥前系	B区	XO		5.2	口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 (外面) 二重輪目文・18C くらわんか窓		
20	11	磁器碗?	不明	B区	XO		2.5	口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 (外面) 草花文・18C～19C		
21	11	磁器碗	不明	B区	XO	(119) (38)	55.5	4.7	型押し成形	緻密・良好 (外面) 莲瓣文・鉢縫繩・近代			
22	12	磁器皿	不明	B区	XO		4.0	口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 (内外面) 型紙輪目・見込・目跡・近代		
23	12	磁器皿	不明	B区	XO	(86)	23.8	5.1	口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 (内面) 剥離軸写・19C	
24	12	磁器皿	不明	B区	XO		4.5	口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 (内面) 剥離軸写・近代		
25	12	磁器碗か?	不明	C区	表上		3.2	口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 (外面) 不明 (内面) 額縁・19Cか		
26	12	陶器小皿	瀬戸・美濃	C区	SK1080	(81.5)	7.2	口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 灰釉・中世・RP44		
27	12	磁器皿	不明	C区	表採		4.5	型打ち成形	緻密・良好 菊文・明治・白角皿				
28	12	磁器皿	不明	C区	表採		3.2	口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 近代か・RP42		
33	13	陶器碗	不明	A区	XO		口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 18C 壘			
34	13	陶器碗	不明	A区	XO		口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 近世か			
35	13	陶器植物	不明	A区	XO		口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 鉢縫繩・近世			
36	13	陶器 蓋か?	不明	A区	XO			口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 時期不明		
37	13	陶器急須	不明	A区	XO						型打ち成形 細密・良好 近現代		
38	13	陶器	不明	A区	XO			口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 (外面) 鉢縫繩 (内面) 灰釉 19C以前・器種不明		
39	13	磁器碗	肥前系	A区	XO			口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 19C		
40	13	磁器碗	不明	A区	XO			口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 (外面) 萩文・19C		
41	13	磁器碗	不明	A区	XO			口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 (外面) 草花文・19C		
42	13	磁器碗	不明	A区	XO			口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 (外面) (松竹梅)・近代		
43	13	磁器碗	肥前系	A区	XO			口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 (内面) 草花文・19C・ハリササギ		
44	13	瓦質土器 盤?	不明	A区	XO			ナデ	ナデ	ナデ	砂粒混入 良好 時期不明		
45	13	陶器 土着?	不明	B区	XO			ナデ	ナデ	ナデ	緻密・良好 近現代		
46	13	磁器皿	肥前系	B区	SX1036			口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 文様不明・18C		
47	13	磁器皿	不明	B区	XO			口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 剥離軸写・近代		
48	13	磁器皿	不明	B区	XO			口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 19Cか 文様不明		
49	13	陶器	不明	C区	CB3559 - 2411 北里 F1			口クロ	口クロ	口クロ	緻密・良好 鉢縫繩・近現代か・器種不明		

表7 金属製品観察表

番号	番号	写真 図版	種別	地区	出土地点	長さ 直径	計測値 (mm/g)			備考
							幅	厚さ	重量	
26	29	12	鍔 (寛永通宝)	A区	XO	24	1.6	3.0	1697年以降・新発永	

表8 石製品観察表

番号	番号	写真 図版	種別	地区	出土地点	計測値 (mm)			石材	備考
						長さ	幅	厚さ		
26	30	12	石道	A区	XO	26.5	6	5.5	ろう石	明治

IV 理化学分析

1 土壤理化学分析（1）

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、B区遺構東側から検出された平安時代の長方形の土坑4基について、遺体埋納、動物遺体等の痕跡の有無を土壤理化学分析（リン酸、カルシウム全量）により検証する。

1 試 料

分析調査対象とされた土坑は、B区遺構東側のSK1058・1065・1073・1075の長方形土坑4基である。試料は、それぞれの土坑で採取された覆土土壤各1点計4点で、全点を分析に供した。

野外土性（ペドロジスト懇談会編、1984）は、それぞれLiC（軽填土）である。土色はSK1058で10YR2/3黒褐であり、他の土坑サンプルは10YR2/1黒と腐植が多い土壌である。

2 分析方法

ここでは、土壤中に含まれるリン酸およびカルシウムの含量を測定する。リン酸はとくに骨に多量に含まれ、土壤中では比較的拡散・移動していくため、その局所的な濃集状況から遺体、骨が埋葬されたことを判断する方法として有効な手法とされている。また、カルシウムはリン酸とともに骨の主成分であることから、その濃集状況も遺体埋葬の手がかりとなる可能性がある。全リン酸、全カルシウムは硝酸・過塩素酸分解一バナドモリブデン酸比色法（土壤標準分析・測定法委員会、1986）に従った。以下に各項目の操作工程を示す。

1) 試料調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料に

ついては、105°Cで4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

2) リン酸、カルシウム含量

粉碎土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO₃）約10mlを加えて加热分解する。放冷後、過塩素酸（HClO₄）約10mlを加えて再び加热分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P₂O₅）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加热減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量（P₂O₅mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

3 結 果

土壤理化学分析結果を表9に示す。リン酸含量は、SK1058で3.23mg/g、SK1065で4.55mg/g、SK1073で3.87mg/g、SK1075で3.94mg/gである。カルシウム含量は、SK1058で1.87mg/g、SK1065で2.74mg/g、SK1073で3.05mg/g、SK1075で3.22mg/gである。リン酸含量はSK1065で最も高い値を示し、カルシウム含量はいずれの土坑も低い値である。

表9 土壤理化学分析結果（1）

試料名	土性	土色	全リン酸 P ₂ O ₅ (mg/g)	全カルシウム CaO (mg/g)	備考
SK1058	LiC	10YR2/3 黒褐	3.23	1.87	
田舎道跡	SK1065	LiC 10YR2/1 黒	4.55	2.74	
B区	SK1073	LiC 10YR2/1 黒	3.87	3.05	
	SK1075	LiC 10YR2/1 黒	3.94	3.22	

備考

(1) 土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外性による。
LiC—軽填土（粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～15%）

(2) 土色：マンセル色表系に準じた新版標準土色図（農林水産省技術会議監修、1997）による。

4 考 察

土壤中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があり（Bowen, 1983; Bolt, Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991）、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0mg/g程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では5.5mg/g（川崎ほか, 1991）という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では、骨片などの痕跡が認められる土壌では6.0mg/gを越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通1～50mg/g（藤貫, 1979）といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。これら天然賦存量は、動物遺体の痕跡を明確に判断できる目安として重要であるが、天然賦存量以下であっても遺体埋納を全て否定するものとは言えない。すなわち、遺体が土壌中で分解した後、その成分が時間経過とともに徐々に系外へと流亡し、その結果含量が天然賦存量の範囲と

なってしまうことがあるからである。

今回の分析調査結果では、土坑覆土試料はいずれも天然賦存量の上限である約3.0mg/gを上回るリン酸が検出された。これより、土坑覆土試料でみられたリン酸の富化は、土色に見られる土壤腐植の量比による影響や動物遺体による影響、さらに耕作など土地利用によるリン酸の固定化などの要因による可能性がある。ただし、今回腐植含量について調査していないため、リン酸の由来が上記のいずれかについて詳細な評価は難しい。また、いずれの土坑覆土試料もカルシウム含量は天然賦存量の範囲内であり、リン酸の富化に対応していない。これについては、上述したように時間経過と共にカルシウムの流亡が進んだものとも考えられるが、現状では評価が難しい。

今後、脂質分析や微細遺物鑑定などの他の調査手法を併用することや、周辺での類例における分析事例を蓄積することにより、過去の土坑内容物について詳細がさらに明らかになることが望まれる。

引用文献

- 農林省農林水産技術会議事務局監修 1967 「新阪標準土色帖」
- 藤貫 正 「カルシウム」『地質調査所化学分析法52』 1979 p.57～61
- Bolt,G.H・Bruggenwert,G.M 1980 「土壤の化学」岩田進午・三輪齊太郎・井上隆弘・陽 捷行訳 p.309 学会出版センター
- Bowen,H.J 1983 「環境無機化学－元素の循環と生物学－浅見義男・芽野充男訳』 p.297 博友社
- ペドロジスト懇談会 1984 「野外の判定」『ペドロジスト懇談会編 土壌調査ハンドブック』 p.39～40 博友社
- 土壤標準分析・測定法委員会編 1986 「土壤標準分析・測定法」p.354 博友社
- 天野洋司・太田 健・草場 敏・中井 信 1991 「中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量」『農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発』 p.28～p.36
- 川崎 弘・吉田 邦・井上恒久 1991 「九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量」『農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発』 p.23～27

2 土壌理化学分析（2）

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本遺跡では、これまでにもB地区で検出された土坑の覆土について、遺体埋納について検討するためにリン酸含量およびカルシウム含量が測定されている。今回の分析調査では、田向遺跡B区、および松橋遺跡において採取された4資料についてリン酸含量、カルシウム

含量を測定し、前回との調査結果と比較することにした。

I 試 料

分析調査対象とされた土坑は、B区遺構東側のSK1058（試料5）、SK1065（試料6）、SK1073（試料7）、SK1075（試料8）の長方形土坑4基である。試料は、それぞれの土坑で採取された覆土土壌各1点計4点を分析に供した。

野外性（ペドロジスト懇談会編、1984）は、SK1058、SK1065、SK1075でSiCL（シリト質壌土）、SK1073でSCL（砂質壌土）である。土色はSK1058、SK1075で

10YR2/1 黒、SK1065 で 2.5Y2/1 黒、SK1073 で 2.5Y3/1 黑褐である。SK1073 は他の試料と比較すると、砂質であり腐植が乏しい他の試料は、腐植が多い土壤である。

2 分析方法

今回の調査では、土壤中に含まれるリン酸およびカルシウムの含量を測定する。リン酸は骨に多量に含まれ、土壤中で比較的拡散・移動しにくいため、その局所的な濃集状況なら遺体、骨が埋葬されたことを判断する方法として有効な手法とされている。また、カルシウムはリン酸とともに骨の主成分であることから濃集状況も遺体埋葬の手がかりとなる可能性がある。

全リン酸は、硝酸・過塩素酸分解バナドモリブデン酸比色法、全カルシウムは、硝酸・過塩素酸分解一原子吸光法（土壤標準分析・測定法委員会 1986）に従った。以下に各項目の操作工程を示す。

試料を風乾後、土塊を軽く崩して 2mm の篩で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm 篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で 4 時間乾燥し、分析試料水分を求める。粉碎土試料 1.00 g をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸 (HNO_3) 約 10ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸 (HClO_4) 約 10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100ml に定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を

加えて分光光度計によりリン酸 (P_2O_5) 濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム (CaO) 濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量 ($\text{P}_2\text{O}_5 \text{mg/g}$) とカルシウム含量 (CaOmg/g) を求める。

3 結 果

土壤理化分析結果を表 10 に示す。なお、表 10 には、平成 22 年度の調査結果も併せて表記する。

今回の分析結果は次の通りである。リン酸含量は、試料番号 1 が 5.81mg/g、試料番号 2 が 5.38mg/g、試料番号 3 が 2.07mg/g、試料番号 4 が 4.45mg/g である。

カルシウム含量は、試料番号 1 が 3.13mg/g、試料番号 2 が 3.69mg/g、試料番号 3 が 1.24mg/g、試料番号 4 が 2.54mg/g である。

リン酸含量は試料番号 1 で最も高い値を示し、カルシウム含量はいずれの土坑も低い値である。

4 考 察

土壤中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量は、いくつか報告事例があり (Bowen1983、Bolt・Bruggenwert1980、川崎ほか 1991、天野ほか 1991)、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約 3.0mg/g 程度である。さらに、化学肥料の施肥といった人为的な影響を受けた黒ボク土の既耕地では、

表 10 土壤理化分析結果 (2)

調査年次	遺跡名	調査区等	試料番号	層位	土性	土色		全リン酸 P_2O_5 (mg/g)	全カルシウム酸 CaO (mg/g)	備考
H25 年度	田向遺跡	B 区 CB3599-1513	試料 1	3 層	SICL	10YR2/1	黒	5.81	3.13	H22 年度道横群東側
		B 区 CB3599-2313	試料 2	1 層	SICL	2.5Y2/1	黒	5.38	3.69	H23 年度調査区南端
	松橋遺跡	第 2 次調査区北東隅		試料 3	SCL	2.5Y3/1	黒褐	2.07	2.07	
		試料 4		4 層	SICL	10YR2/1	黒	4.45	4.45	
H22 年度	田向遺跡	B 区 SK1058	試料 5	道横覆土	LIC	10YR2/3	黒褐	3.23	3.23	
		B 区 SK1065	試料 6	道横覆土	LIC	10YR2/1	黒	4.55	4.55	
		B 区 SK1073	試料 7	道横覆土	LIC	10YR2/1	黒	3.87	3.87	
		B 区 SK1075	試料 8	道横覆土	LIC	10YR2/1	黒	3.94	3.94	

参考

(1) 土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編 1984）の野外土性による。

SICL…シルト質埴壌土（粘土 15～25%、シルト 45～85%、砂 0～40%）

SCL…砂質埴壌土（粘土 15～25%、シルト 0～20%、砂 5～85%）

LIC…輕埴土（粘土 25～45%、シルト 0～45%、砂 10～55%）

(2) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修 1967）による。

5.5mg/g（川崎ほか 1991）という報告例がある。また、当社がこれまでに実施した分析調査事例では、骨片などの痕跡が認められる土壤では 6.0mg/g を越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通 1～50mg/g（藤賀 1979）といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。これら天然賦存量は、動物遺体の痕跡を明確に判断できる目安として重要であるが、天然賦存量以下であっても遺体埋納を全て否定するものとは言えない。すなわち、遺体が土壤中で分解した後、その成分が時間経過とともに徐々に系外へと流亡し、その結果含量が天然賦存量の範囲となってしまうことがあるからである。

今回の分析調査結果では、試料番号 3 を除いた試料で天然賦存量の上限である約 3.0mg/g を上回るリン酸が検出された。これよりリン酸の富化は、土色に見られる土壤腐植の量比による影響や動物遺体による影響、さらに耕作など土地利用によるリン酸の固定化などの要因による可能性がある。一方、カルシウム含量はいずれの試料も天然賦存量の範囲内であり、リン酸の富化に対応していない。

ここで前回の分析結果と比較すると、カルシウム含量に大きな変化がないものの、前回調査した土坑覆土のリ

ン酸含量は今回の測定値を下回る資料が多い。また、前回の調査では土色が黒褐色を示す SK1058 採取試料のリン酸含量が最も低かったが、今回の分析においても土色が黒褐色を示す試料番号 3 のリン酸含量が最も低い。すなわち、リン酸含量と土色に何らかの関連がある可能性が高い。また、東海林（1992）によると、山形県村山地域の水田土壤内の黒ボク土系におけるリン酸含量は、 $2.59\text{mg/g} \sim 9.57\text{mg/g}$ と一定の傾向ではなく、幅広いリン酸保持量になると報告されている。これらのこと考慮すると、今回および前回の調査で得られたリン酸含量は元来持つ地力によるリン酸との見解が持たれ、土壤腐植に由来する可能性が高い。

以上、今回の結果からみても、前回調査した 4 基の土坑（SK1058、SK1065、SK1073、SK1075）に遺体が埋葬されていた痕跡を明らかにできなかつた。したがって、墓坑以外の用途として利用されていた可能性も考慮し、脂質分析や微細遺物鑑定などの他の調査手法を併用すること、さらに今後は土壤腐植の影響を除いて検討する必要、すなわちリン酸含量とともに全炭素含量を測定して相関関係を調べることが有効であると思われる。

引用文献

- 農林省農林水産技術会議事務局監修 1967 「新版標準土色帖」
- 藤賀 正 「カルシウム」「地質調査所化学分析法 52」 1979 p.57～61
- Bolt,G.H・Bruggerwert,G.M 1980 「土壤の化学」 岩田進午・三輪喜太郎・井上隆弘・陽 捷行訳」 学会出版センター
- Bowen,H.J 1983 「環境無機化学－元素の循環と生化学－浅見輝男・茅野充男訳」 博友社
- ペドロジスト懇談会 1984 「野外の判定」「ペドロジスト懇談会編 土壌調査ハンドブック」 p.39～40 博友社
- 土壌標準分析・測定法委員会編 1986 「土壌標準分析・測定法」 博友社
- 天野洋司ほか 1991 「中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量」「農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」 p.28～p.36
- 川崎 弘ほか 1991 「九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量」「農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」 p.23～27
- 東海林 覚 1992 「山形県の水田土壤におけるリン酸蓄積の実態とその有効活用」「山形県農業試験場特別研究報告 21 号」 p.1～p.38

V 総 括

1 調査のまとめ

本遺跡は、第1・2次調査を平成22・23年の2カ年にわたって4,700 m²の発掘調査を実施した。その結果、平安時代と考えられる溝跡、土坑・柱穴、中世と考えられる倒木痕、平安時代の土師器・須恵器、中近世・近代以降の陶磁器、瓦質土器・錢貨、石製品が出土した。断続的ではあるものの長期にわたる時代の変遷が確認できる。

A区は、平成22年度に調査を行った地区で調査面積は3,700 m²である。遺構は溝跡、柱穴などを検出した。出土遺物は第Ⅲ章に先述した通りであるが、A区のみ少量の土師器・須恵器片が出土している。またA区東側は昭和40年代のほ場整備により削平を受けており、遺構は確認されなかった。

先述した通り遺構からの出土遺物は少量であり、明確な遺構の時期特定には至っていない。

溝跡は、10条確認され、そのほとんどが西側に集中している。共通する特徴は、土層は黒色シルトを基調とし、深さ5～20cmを測り、あまり深いものではない事が挙げられる。また数条の溝（SD10～12・113・114・149・235）は北西方向を主軸としている。後述するが、これらは主軸方向が同方向の観点から道路に付される側溝（SD114・149・235）の可能性が考えられる。

柱穴は、約60基を検出した。平面形は、円形・楕円形を呈する。断面形は壁面が緩やかに立ち上がり逆台形を呈するもの、壁面がやや外傾するもの、壁面がほぼ垂直に立ち上がり、底面が丸みを持つU字型を呈するものが確認された。

しかし、半数以上が柱穴と考えられるが判然としないビットであり、堆積状況から柱痕跡が明確に確認できるものは6基（SP63・69・87・97・128・142；表3を参照）と少数であった。それぞれの位置関係はSD113・114の左右に位置し、北東方向を主軸とした柱列状に位置している（第27・28図）。柱間距離は、SP128・69・63は北から4.5m、5mを測り、主軸方向はN-

15°～Eとなる。SP142・97・92は北から6m、4.3mを測り、主軸方向はN-12°～Eである。いずれも柱間距離約4～6mを測る。ただし、両柱列は建物跡を構成するには至らない。

B区はA区同様、平成22年度に調査を実施し、調査面積は800 m²である。検出した遺構は土坑、柱穴などである。

検出した土坑は、5基確認され、その中の4基（SK1058・1065・1073・1075）の土坑は堆積状況から墓壙の可能性が考えられ、業務委託による土壤理化学分析（第IV章）を行った結果、4基共にリン酸含量は天然賦存量の上限値約3.0m/gを上回る数値であった（表9）。その要因はいくつかあるものの明確ではない。カルシウム含量は天然賦存量の上限値範囲内であり、リン酸の富化には対応していない。しかし、カルシウム含量が上限値範囲内でも墓壙の可能性が排除されるわけではなく、その要因は時間経過と共にカルシウムの流亡など理由は様々であるが、現状としては判断が難しい。

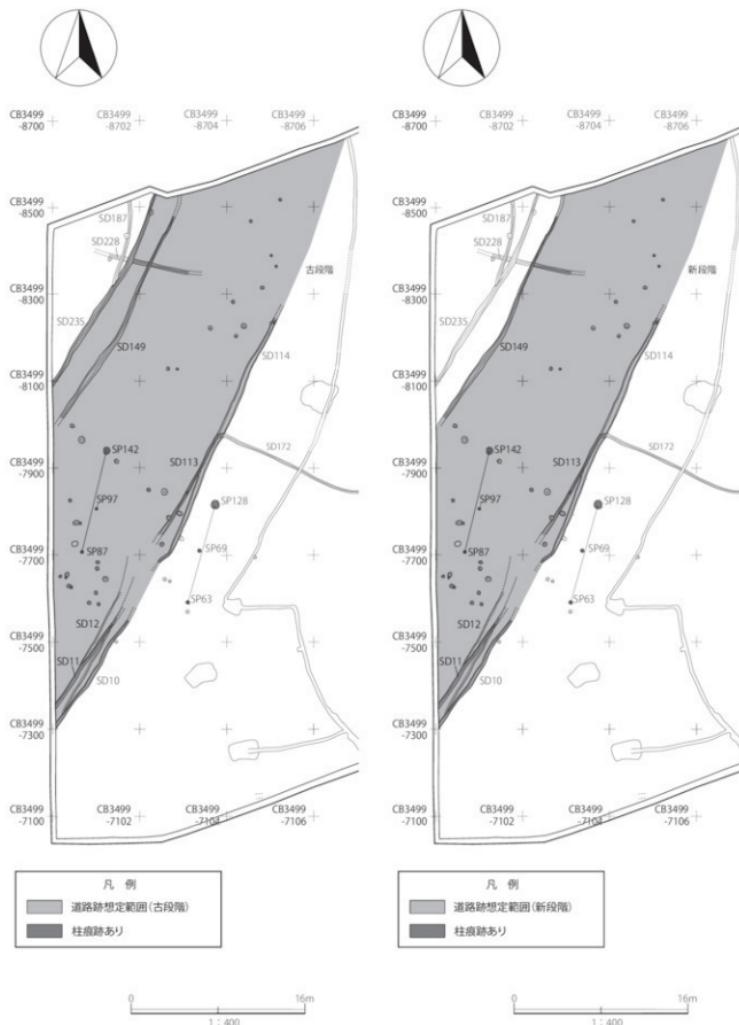
C区は、平成23年度に第2次調査としてB区の北隣の調査区で200 m²を調査した。遺構は、倒木痕2基を検出した。堆積状況から西方へ倒木したことが確認され、SK1080倒木痕から中世の瀬戸美濃産陶器小皿が出土している。このことからSK1080は中世に倒木したことなどが言える。

本遺跡の遺構の分布域はB区を北限とし、最西端であるA区西側から遺構の密集が高いことから、調査区全体が削平されているもののさらに西側に遺構の分布域は広がるものと考えられる。今回の調査では、竪穴住居跡や掘立柱建物跡は確認されなかった。

2 SD114・149・235について

先述した通りSD114・149・235溝跡は、主軸方向が同方向であることから道路跡に付される側溝の可能性が考えられる。以下に詳細を述べる。

3条の溝跡は、A区北西隅に位置し、それぞれ主軸方向が北東方向を示す。それぞれの溝跡から遺物は出土し



第27図 SD114・149・235道路跡想定図(古段階)

第28図 SD114・149・235道路跡想定図(新段階)



第29図 道路跡想定ライン図

※大日本帝国陸地測量部発行5万分の1地形図「福岡」「尾花沢」に加筆・修正(第30・31図)

※国土地理院発行2万5千分の1地形図「富並」「延沢」「谷地」「福岡」に加筆・修正(第29図)

ておらず、時期特定には至っていないが、周辺遺構から古代(平安時代)に帰属するとみなしたい。

SD114・149・235は、道幅に伴う側溝の可能性があり、道幅を画定する役割を担っていたと推測される。道幅は、SD114～235溝跡間の芯々距離が14～15m、SD114～149間が12～14m、SD149～235間が2～3mであることから、12m前後と考えられる。路面は、昭和40年代のは場整備により削平を受けており、確認する事はできなかった。しかし溝間に点在する小溝やビットなどが横位に並ぶことから路面を構築する際に版築した波板状凹凸の可能性も考えられる。小溝とビットの深さは約10～20cmである。ただし、削平を受けているため、断定はできない。波板状凹凸(硬化)面は、埼玉県所沢市に所在する東の上遺跡をはじめ、全国各地で確認されている遺構で、その特徴は円形・楕円形の土坑が一定間隔で並ぶ特殊な工法であり、路面舗装のため



第30図 明治34年測量地形図



第31図 明治34年測量昭和40年修正地形図

の路床として構築されたと第一に考えられている。その他の説としては、枕木やコロの痕跡、路床の改良、牛馬の歩行痕跡などいくつかの説が提示されている(文化庁2013)。現在のところ、用途は明確ではないといふ。

本遺跡の成果から言えることは、それぞれの溝間は路面(道路跡)の可能性があるものの、明確に道路跡とは言い難く、今回は道路状遺構として留めておく。

SD114・149・235溝跡を道路状遺構と想定した場合、以下の事が考えられる。

3条の溝跡の組み合わせは明確ではないが、それぞれが北西方向を主軸と平行して位置する。古代道路の特徴として、時間経過と共に道路幅が狭くなる傾向が指摘されている。このことからSD114～235間を古段階(第27図)、SD114～149間を新段階(第28図)と仮定した。

本遺跡周辺には田向2遺跡、松橋遺跡、蝶田遺跡、経塚森遺跡、清水遺跡などの古代の集落跡が確認されて

いる（第29図）。終始地点は確認できないが、溝の主軸方向は清水遺跡の方に向いており、集落間における道または街道として整備された可能性も想定できよう。

明治34年測量の地形図（第30図）を見ると、当該期の地図は明記されておらず、針葉樹林が並ぶ地であり、南北方向に細長い地割りが見られる。調査区西側の道路は通っていないが、昭和40年修正図（第31図）を見ると、現存する道路を確認した。しかし、昭和40年以前の地形図には記載されていないことから、清水遺跡への道に想定の可能性を残すものの、本遺跡で確認された道路跡は、明治以前に廃絶し、調査区西側に現存する道路へ取り替えられた可能性がある。

現在までの知見から幅員12m前後を有する道路跡（駅路）は、7世紀後半から8世紀末・9世紀初頭に廃絶する。この駅路（道路跡）のことを中村太一氏は「前期駅路」と呼称している。その特徴は道路幅12m前後で、全体的に極めて直線的としている（中村2000）。SD114・149・235溝跡は、溝間の芯々距離の観点だけから見れば、12m前後の値を示す。しかしSD114・149・235溝跡については、一部、先の特徴と合致するが、現在のところ、出羽国（山形県）の官道（駅路）は本遺跡から東方に想定されているため、伝路や道路跡などの可能性と共に検討を加えなければならない課題としたい。

引用・参考文献

- 木下 良 1996 「古代を考える 古代道路」 吉川弘文館
 近江俊秀 2013 「古代道路の謎－奈良時代の巨大国家プロジェクト」 神伝社
 高桑弘美 2004 「出羽国－山形県」『日本古代道路事典』八木書店
 中村太一 2000 「日本の古代道路を探す 沢合國家のアウトバーン」 平凡社
 文化庁文化財部記念物課監修 2013 「発掘調査のひき 各種遺跡調査編」 同成社
 財團法人山形県埋蔵文化財センター 1997 「猪の瀬遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第50集
 財團法人山形県埋蔵文化財センター 1999 「四つ塙遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第70集
 財團法人山形県埋蔵文化財センター 2001 「四つ塙遺跡第2次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第74集
 財團法人山形県埋蔵文化財センター 2001 「四つ塙遺跡第3次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第90集
 財團法人山形県埋蔵文化財センター 2004 「達磨寺遺跡第3次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第127集

写真図版



A区調査前全景（南から）



A区北壁基本層序（南から）



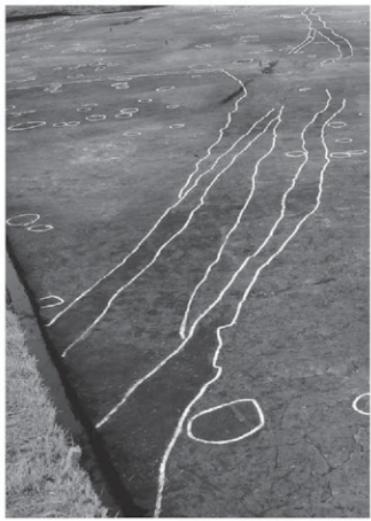
A区東側遺構検出状況（北から）



A区西側遺構検出状況（北から）



A区完掘状況（南から）



SD10～12 検出状況（南西から）



SD149・187・228・235 検出状況（南西から）



SD10～12 完掘状況（南西から）



SD149・187・228・235 完掘状況（南西から）



SD113・114 棟出状況 (南西から)



SD114・SP118 断面d-d' (南から)



SD149・228 断面b-b' (南西から)



SD149 断面c-c' (南西から)



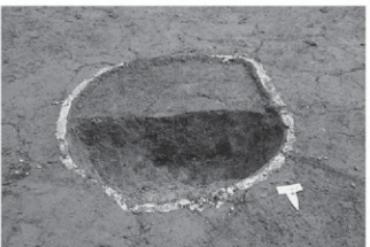
SD187・228 断面g-g' (南西から)



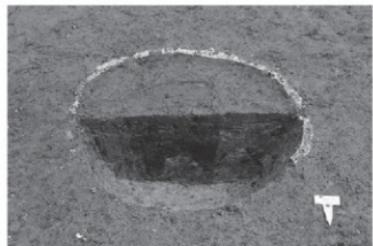
SP128 断面 (南から)



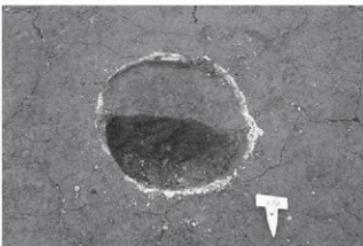
SP131 断面 (南西から)



SP142 断面 (南西から)



SP147 断面（南から）



SP192 断面（南から）



SP197 断面（南から）



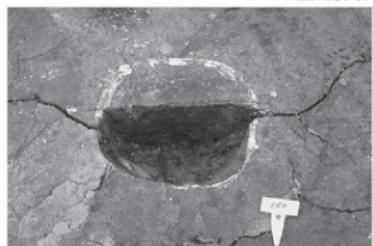
SP203 断面（南から）



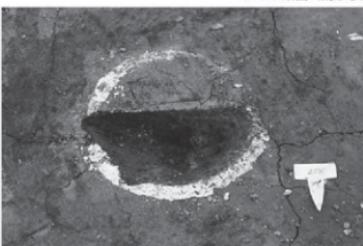
SP204 断面（南から）



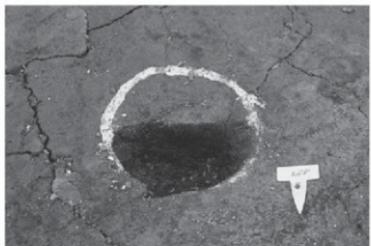
SP205 断面（南から）



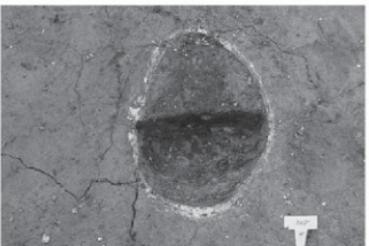
SP240 断面（南から）



SP244 断面（南西から）



SP245 断面（南から）



SP248 断面（南から）



SP268 断面（南から）



B区東壁基本層序（西から）



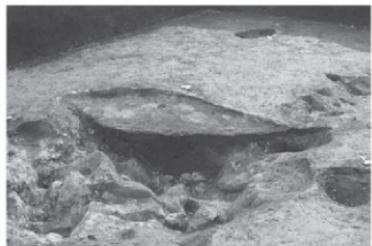
B区北側遺構検出状況（南西から）



B区南側遺構検出状況（北東から）



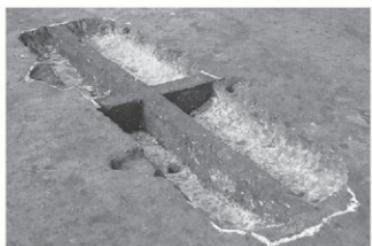
B区完掘全景（南から）



SK1002 断面（北東から）



SK1002 完掘状況（北東から）



SK1058 断面（南西から）



SK1058 完掘状況（南東から）



SK1065 断面（南東から）



SK1065 完掘状況（北西から）



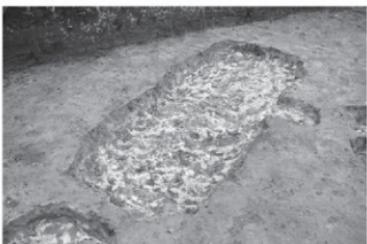
SK1073 断面（南東から）



SK1073 完掘状況（北西から）



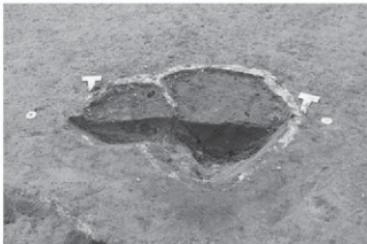
SK1075 断面（北東から）



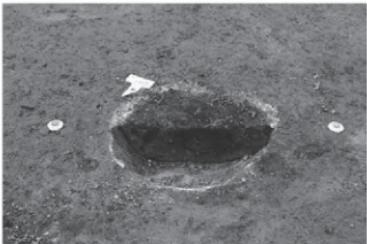
SK1075 完掘状況（北西から）



SK1058・1065・1073・1075 完掘状況（東から）



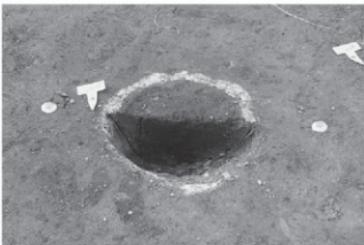
SP1005・1006 断面（南西から）



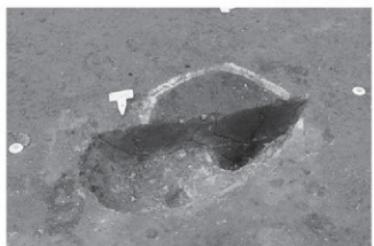
SP1013 断面（南西から）



SP1016 断面（南西から）



SP1028 断面（南西から）



SP1031 断面（南西から）



C区調査前全景（北から）



C区南壁断面（1）（北西から）



C区南壁断面（2）（北から）



SK1079 断面（南から）



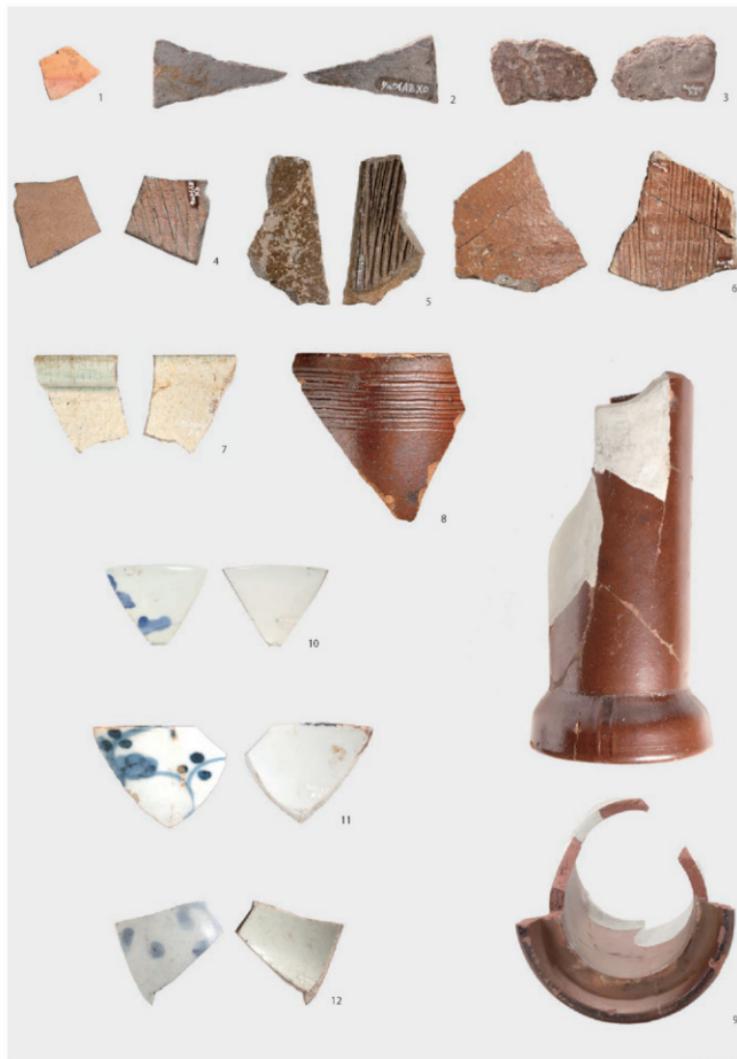
SK1080 断面（北東から）



C区遺構検出状況（西から）



C区完掘状況（東から）



A区出土遗物



A・B区出土遺物



22



23



24



25



27



26



28



29



30

A・B・C区出土遺物 (1)



A・B・C区出土遺物 (2)

報告書抄録

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第217集

田向遺跡第1・2次発掘調査報告書

2015年3月31日発行

発行 公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-3246 山形県上山市中山字壁屋敷 5608番地

電話 023-672-5301

印刷 田宮印刷株式会社

〒990-2251 山形県山形市立谷川3丁目1410番1号

電話 023-686-6111

